
鬼 繙ぎし者

蒼炎鬼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鬼 繙ぎし者

【Zコード】

Z9532A

【作者名】

蒼炎鬼

【あらすじ】

古来、鬼は人ならざる者として恐れられてきた。そして現代、鬼は人を選ぶようになつていた。継ぎし者が現れるまで……

序章 鬼（前書き）

『非現実の現実』に次いで連載小説です。
これらの更新は不定期なので皆さんゆっくりとお待ちください。

序章 鬼

鬼

それは恐れられしもの

鬼

それは人ならざるもの

鬼

それは血を好むもの

鬼

それは異形のもの

我
九
一
旅

それは叶わぬ一放たり

鬼

混沌を歩むもの

鬼

それは只
一つの欲望のままに生きる

鬼

それは血を求め この世を徘徊せし者

鬼

それは……

テ……

ヒトガツクリダシタ【業】ノナレノハ

継ぎし者よ 己が運命を呪え……

第1章 1話「眠る」

「何で」「んな」と「……」

左肩から溢れる血を抑え両膝をつく少年。彼の前にはまだ幼い少女が妖艶な瞳で彼を見下していた。

「だつて…、お兄ちゃんが悪いのよ?」

はつきつと聞こえる声。ヒヒヒガ……。

「すすむ進ー！ 進ー！ 起きなさい」

突然の大声で少年……進は起こされた。

「あ？ なんだよ？」

明らかに不機嫌な進はゆっくりと突っ伏していた机から顔を上げる。

「なんだよじやないわよー あんたが屬されてたから起こしてあげたのに」

「余計なお世話」

軽く無愛想に返事を返す進。しかし、話しかけてきている同世代の少女、富崎 楓はそれが気に入らず机を強く叩き立ち上がった。

「なにその態度！？ 少しくらい感謝しなさいよー。」「はいはい。ありがとお！」わざとましたあ。楓様「

「あんたねえ……」

「はい！ そこまで。 子供達がおびえているよ」

先生の声が聞こえ一人は喧嘩を止めた。正確には止めざるをえなかつた。

「この決着はいつもの【アレ】で決めるわ

「いいだろ」

そう言い楓は椅子に座り、進は前を見た。

この学校はクラスが一つしかない。つまり、その分生徒数が極端に少ないので。そしてこの学校の不思議なところは小学から高校までの年の子が一緒に授業をすること。そうは言つても学年ごとにテキストが配られ、それをやつしていくだけだ。

キーン コーン カーン コーン

授業終了のチャイムが学校に鳴り響く。このクラスには日直などはいなくチャイムがなれば即授業は終了だ。

「眠い……」

進は欠伸をしたあと口を擦り呑いた。そんなとき右隣から彼を呼ぶ声が聞こえた。ちなみに楓は左隣だ。

「お兄ちゃん。 眠いの？」

話しかけてきたのは進の妹金木 燕奈えんなだった。まだあどけなさの残る瞳が進を見つめる。

かなぎ

えんな

「ああ。 少しな……」

「次、体育だよ」

「そうか。 ありがとな燕奈」

そう言い燕奈の頭を撫でる進。すると燕奈はエヘヘと笑い教室をあとにした。

「さて、俺も行くか」

進はようやく立ち上がり剣道場を目指し歩き始めた。

剣道場は大して広くもない。試合場は二つありそこでは竹刀を持ちチャンバラをしている生徒がいる。外見から小学生くらいだろう。一人は進を見ると足早に駆けつけ竹刀を渡してくれる。

「今日こそ勝つてよー！」

「まかしとけーー！」

彼は力強く言い試合場に入った。そこには女とは思えない程の闘気を放つ楓がいた。

「今日は勝たせてもらひわ」

「毎度のことながら台詞を変えたら？」

そんな会話も束の間。楓は真正面から竹刀を振り下ろしてくる。その攻撃を進は軽く右に避けるが、楓は勢いを殺すことなく攻撃を繋げる。ちなみに楓は剣道有段者だ。

「ふう。 やすがだな」

「あんたもね」

横薙の竹刀を防ぎ、数秒の静寂が訪れた。一人は後ろへ数歩下がり間合いを空ける。その間にも楓は鬪気を放つが進は感じていない。まさに【柳に風】・【暖簾に腕押し】とはこのことをいうのだろう。

他の生徒は周りに座り一人の勝負を観戦している。先生すらも。

先に動いたのは進だ。銅狙いの突きが楓めがけて繰り出される。しかし、楓は体を半身ずらしそれを避け進の腹に竹刀を叩き込もうと竹刀を振る。が、進は【それ】を読んでおり体を反り竹刀を避ける。

「あんた。なんて体してんの？ あの体勢から反るなんて不可能……よつ……！」

話しながらも竹刀を垂直に振り下ろしてくる楓。だがその攻撃は空を切った。確実に当たると思っていた攻撃が外れたのだ。

「……よつと」

進は反った姿勢から逆立ちになり腕の力のみを利用して後ろ——進から見て腹の方向——へ跳んだのだ。そして彼は竹刀の先を楓の頭に置いた。

「俺の勝ちだな。 楓」

悔しさのあまり楓は声が出ず両膝を折り、座り込む。進は自分と

彼女の竹刀を他の生徒に渡していた。

「お兄ちゃん凄いよ！ 楓さんに勝っちゃうなんて！…」

「ま、あいつが技を使わなかつたから勝てただけだな」

未だ興奮が冷めない燕奈に對して進はえらく冷静だった。

「わざ〜？」

「そり。 楓は【剣道】じゃなくて【剣術】を競つてゐるはずだ」

進は一回の試合でわかっていたのだ。本来、剣道では半身をすらしても防具の部分が当たる。しかし、実践は防具は付けずなおかつ真剣での切りあいだからだ。

「なんだ。 じゃああたしたちの家と
(言つたな。 家のことは誰にも言つちゃいけないんだ)

何か言いかけた燕奈の口を手で押さえ妹にしか聞こえないように進は囁く。

キーン ローン カーン ローン

チャイムが鳴り体育の授業は終わった。といつゝは、今日の授業は終わった。この学校は朝のHRはあるが帰りのHRはないのだ。

「終わりか。 眠…」

進は欠伸をして帰る支度をしている。そんな中、悔しさから立ち直つた楓が進に話しかけてきた。

「じゃあね。明日は勝つからー。」

「ねつ。じゃあな。燕奈、帰るや。」

燕奈を呼ぶ進だが眠気は頂点に達している。そして呼ばれた燕奈は友達と話している。

「少し寝るか」

そう咳き進は浅い眠りについた。どうか燕奈が遅く起こしてくれること。そんなことを想いながら。

2話 重なる声

「ふああ～……。よく寝た……って燕奈？」

熟睡から醒めた進は辺りを見るが教室には誰もいなかった。それならまだいいが、外を見ると綺麗なオレンジ色に染まっていた。どうやら彼は小一時間寝ていたことになる。

「なんで起こしてくれないんだよー！」^{言いつか}燕奈はどうだー？

進は胸ポケットから携帯電話を取り出し燕奈に電話をかけた。

（…………はい。あ、お兄ちゃん？）

「『お兄ちゃん？』じゃなくて今何処にいるんだ？」

進は怒る様子もなく燕奈に問いかける。そして、返ってきた言葉は。

（今？今は花ちゃんと学校探検だよ。【開かずの間】に入ろうと困ったの）

「開かずの間？そこは単にドアが変形して開かない扉だろ？じゃあ、探検してな。俺も行くから」

（わかった。バイバーイ）

ブツン……　ツー　ツー　ツー

電話をきり進は開かずの間を田指す。開かずの間とは一階の北端にある部屋で扉が何かの事故で変形し、開かなくなつた部屋のこと。なぜか扉には除霊の札が貼られている。多分、そうしていれば誰も

入らないという先生達の魂胆だろ？。

一階の北端に歩き続ける進。しかし、階段と廊下の曲がり角で妹の友達、山村花とぶつかった。彼女は息を荒げ、顔には大粒の涙が溢れていた。進は明らかに違和感を感じ彼女と目線を合わせ質問する。

「どうしたんだ？」

「わからないの……。えんなちゃんが開かずの間に入ったら、急に怖くなつたの。だから進さんを呼びに来たの……。ヒグツ……」

泣いている花の頭を軽く撫で、進は早く帰るように言った。彼女が下駄箱に向かうのを見送った後に、彼は己のもつ最速の速さで廊下を駆け開かずの間へ向かつ。

扉の前まで来た進は息をととのえ扉に手をかける。だが、歌が聞こえ扉を開ける手を止めた。

『月の光は鬼をよび 暗き闇へと連れていく 暗き心は命を枯らし
心は闇へ墜ちていく』

歌を歌っている声には聞き覚えがあった。もちろん燕奈である。しかし、彼女の声とは別に他の人間の声が聞こえた。

「へた…！ 開かねえ」

自分の精一杯の力を出しても扉はびくともしない。が次の瞬間、開かない扉が外れた。正確には吹き飛んだのだ。進は反対側の扉の前にいたが危険を感じ吹き飛ばされた扉側に跳んだ。そして前を見た彼の目には信じ難い光景が入ってきた。

『アラ？ アナタハダレ？』

「燕……奈？」

外見こそ燕奈だったが唯一違つ部分があつた。それは……瞳。

いつものあどけない黒の瞳ではなく右目は青、そして左は銀色だつた。なにより彼の妹ではないとわかるのがやはり瞳だ。いつも無邪気に見つめてくる瞳はそこには無く、妖艶な瞳があつた。

『エンナ。 コノオンナハエンナトイウノカ。 キニイツタ』

——【あれ】、創れるか？父上は創れると言つたが……。 考えてる場合じゃない！燕奈を助けることが先決だ！

瞬時に悟つた進は右手の人差し指と中指を立て他の指を握り、自分の胸の前にだした。それはまるで【忍】が印を組むようだつた。

(構築式形成… 圧縮… 空間符作成… 構築式注入…)

進は頭の中でプロセスを組み、目を瞑り咳きながら動作を行つてゐる。彼の周りは歪み、もはやそこには時間という概念すら感じさせない。

「完成…。 【鬼符・縛】（おにふ・しばり）」

いつの間にか彼の立てた指には札が挟まっていた。そして、挟まれたそれは燕奈をめがけて一直線に飛んでいく。

『「コンナモノ。ヨケルヒシヨウモナイ』

完全に余裕の彼女は腕で札を払う。が、払われたそれは彼女の腕に張り付いた。

『「ナンダ？ コレハ？」』

「言つただろ？ 【鬼符・縛】だつて。それを貼られたやつは自分の意識に関係なく体が動かなくなる」

『「コシヤクナ……』』

彼女の動きは完全に止まり進は安全を確認し近づく。そして燕奈に触ろうとした刹那。彼女が口を開いた。

『「オマエ、【鬼】力？ …… イヤ、【不現者】力
「鬼？不現者？何のことだ……」』

不思議な言葉を残して彼女の意識は消えた。しかし、進に安堵の気持ちとは無かつた。

「あれ、お兄ちゃん？どうしたの？」
「なんでもないよ。燕奈は寝てたんだ。花ちゃんは先に帰らせたからな」

彼は苦し紛れの嘘をつきなんとかこの場を「」まかした。そして、妹に貼り付いている札を、印を組み消した。

「お兄ちゃん…… 鼻血出てるよー？」

急に燕奈が叫び、進は拳で鼻を擦る。すると彼の手の甲には鼻血がついていた。そして、その量はすさまじいものだった。いや、量はさほど出ではいなかつた。が、血糊が出ていた。

「くそ……。まだ早かつたな」

鼻を押さえ、血を止めながら進は軽く嘆いでいる。無理に符を創れば本来は死に至るのだ。それが、鼻血だけですんだのだからまだ良い方だろう。

「大丈夫？ 痛くない？」

「ああ。もう大丈夫。ありがとう燕奈」

頭を撫で進は燕奈の手を握り一人で帰つた。だが、進はあるの言葉が頭の中に残つていた。

『オマエ、【鬼】力？ …… イヤ、【不現者】力』

その言葉を頭の片隅に記憶し、進は家に帰る。隣には満面の笑みで話していく妹を連れて。

「——ん。——ちゃん。お兄ちゃん!」

妹の声を聞き進は驚いたように燕奈の方を見る。

「どうした!?」

「家に着いたよ?」

燕奈に言われ家を見る進。彼らの家は家とは呼べず【屋敷】と呼んだほうがふさわしいだろう。

「そつか…。ありがとう

「なんでお礼を言うの?」

「いや…。『ゴメン…』」

進は何時になく考え方をしていた。それは先刻の出来事のこと。何故燕奈がおかしくなったのか、何故自分が開けることができなかつた【開かずの間】に燕奈は入れたのか……。

「【兄様】——しっかりして下さい!」

高く響く声が進の耳に入り脳内に響きわたる。

「悪い。疲れてるみたいだ…」

「本当に大丈夫ですか?兄様」

「ああ。大丈夫。家に入ろ!」

一人は屋敷に入つていいく。この屋敷は古い理に従つてゐるらしい。
そのため何故か言葉遣いも決められている。兄は兄様。父は父上。
母は母上と。

「ただ今帰りました」

進はこの家は嫌いだった。古い理に従うだけの家が。しかし決してそういうことは表に出さず進は自分の部屋に向かい歩く。

「今日は散々だったな。楓と喧嘩して試合して、挙げ句の果てに開かずの間に入つちまうとは」

独り言を言いながらベッドに横になつていると廊下から足音が聞こえた。

「進。帰つてきたのか……」

「はい」

「では、稽古だ。急いで支度をしろ」

「……はい」

部屋に入つてきたのは進の父・神羅しんら猛たけるだ。それと、進と燕奈は普段学校では【金木】（かなぎ）と名乗つているが本来の名字は【神羅】だ。

進は父がいなくなるのを確認した後、服を着替え道場に向かつた。

道場では猛が竹刀を持ち仁王立ちしている。進は彼が放つ鬪氣に気圧されながらも前に進み落ちてある竹刀を取つた。

「始めるぞ……構える」

そう言い猛は体の正面に竹刀を構える。しかし、進は腕を下ろし自然体のままだ。

「何故構えぬ？」

猛は不思議な者でも見るような目で実の息子を見る。

「俺は……
「理を忘れたか」「
「私は……自由に生きたいのです」「
「ならば100年の歴史を潰してもいいのか……」

怒りを押し殺しあくまで冷静に話す猛。しかし、そんなことは構わず進は話を続ける。

「歴史は大切ですが、それは【私】ではなく【昔の誰か】……。この家には【俺】が居ないのです。【心】がなく、【動くだけの人形】にはなりたくないのです！」

ヒュン……

空気を切る音が聞こえ進の腹に竹刀が当たる。彼は父の突然の行動に驚く。そして、次の瞬間彼は壁に叩きつけられた。

「ならば、儂を倒してみよ！-そつすれば今までの戯れ言は取り消してやろつ」

「戯れ言などではありません。私は自由に生きたいだけだ」

ドスツ
……

鈍い音が響いた。

「いい加減にしろ…。お前は一族を消すつもりなのか」

猛は竹刀を進の腹に刺している。彼の持っている竹刀の柄を見るとなにやら札が貼られている。そして、竹刀を腹から抜き、竹刀を捨てて父は道場を去った。

ドシャ
……

血溜まりの床に進は力なく倒れ意識を失った。

4話 絶望（前書き）

昨日から試験が始まつたので更新が遅れます。申し訳ありません

4話 絶望

「……ここって、俺の部屋……？ 痛……」

いつの間にか進は自分の部屋のベッドに横たわっていた。そして、腹には包帯が巻かれていた。

「気づきましたか？」

声をかけてきたのは進の母、神薙 恵しんななぎ めぐみだ。

「母上……。もしや、母上めいじょうが私をここまで？」
「ええ。治療を施した後に運びました」

——そんな細腕でどうやって？

進は感謝よりも疑問が浮かんだ。

「【符】の力が無ければ私はあなたをそこに置いたままでしたよ

符といつ単語を聞き進は納得した。確かに符があれば、彼をここまで運ぶことは可能だ。

「母上は、符は何をお持ちで？」

「私が持っているのは【強】だけですよ」

彼女が言った【強】とは簡潔に言えば強化のこと。足に貼れば足が。腕に貼れば腕が強化される物。つまり恵は、両腕に貼り進を運んだのだ。

「今日はもう寝なさい。 体を休めるのです」

進は彼女の声に従い、 静かに目を開けた。

「おやすみ……。 進

「ん……。 中途半端な時間に起きたまつた……」

彼が起きたのは午前3時だった。

「そりゃ 5時に寝たらいつなるわな……」

進は軽く嘆き部屋の外にでた。もちろん家の人は全員寝て居る……はずだった。

(――だ)
(――か――)

――今のが、 父上と母上か?

進は微弱な声を聞き、 怪しいと思いつづけへ降りていいく。 音をたてずにはない。

「――こう」と――

——聞こえねえ。もつ少し近づいてみよ。

細心の注意を払い進は話しがする部屋へ近づく。

「わかつたか？ あくまで内密にだ。奴には知られてはならん」

「……わかつたわ」

——何の話をしているんだ？

「鬼はおそれく進を選ぶだらう。しかし、奴には扱えず【不現者】になるだらう……」

「【覚醒者】にはなれないのですね……。何故ですか？」

「じつて言つなれば【決意】」

——決意。何の決意だ？

不可思議な会話を進はただ聞いている。——自分に関係している。

「いいか。忘れるな。儂が子を作るのは【一族の衰退を防ぐ】ためでも【一族の繁栄】でもない。ただ【純血の鬼を作る】ためだ」

その言葉を聞き進は絶望した。厳しくても目標だった父。いつも優しく接してくれた母。そのどちらもが偽りだつた。ただ純血の鬼を作るため、そしてその鬼を管理するためだつたなんて。

「燕奈は女だ。子を作れるから殺しあしない

「……では進は？」

その時、外で鳴っていた虫の鳴き声も無くなつた感じがした。そ

して、猛の口から出た言葉は…あまりにも残酷だった。

「もし鬼を継いでいなければ……【殺す】」

この時から、進の運命の歯車は少しずつ、しかし確実に狂い始め
ていた……。

第1章 完

第2章 1話 変化

「行つてきます……」

進は昨日の話の後、一睡もしていなかつた。鬼とは何なのか？そして、【それ】を継いでいなければ……。

「進……」

「……」

進は母の声に驚き、後ろを振り向く。

「何ですか？」

「昨日の話は聞いていましたか……？」

彼の体が硬直した。いつも優しい母から殺氣が放たれたのは生ま
れて初めてだつた。

「何の事でしようか？私は昨日、動ける状態ではないのは知つてい
るでしょう？」「

「そうでしたね。ではお行きなさい。燕奈は行つてしまいまし
たよ？」「

「……行つてきます

なんとか誤魔化し進は燕奈を追つ。

「おまよつ お兄ちゃん
「おはよつ。燕奈……」

妹、燕奈はいつもと変わらず「元気」だった。

——燕奈になら話してもいいんじゃないか?いや、もし一人の内じゃらかに聞かれたら……。

いろんな思考が彼の頭を駆け巡る。しかし、その考えは燕奈の声でかき消される。

「お兄ちゃん……。今日は元気ないね?何かあったの?」

「なんでもないけど?」

無理に元気を装つ進。だが、心内は不安でいっぱいだった。

——こや、燕奈に話したらいくつ子を作れるからと囁いても、父上なら殺しかねない。

そんなことを考えながら歩き、一人は学校へ着いた。

「おはよーっ　えんなちゃん
「花ちゃん」

教室に入るなり燕奈は友達の花に抱きつぶ。そして、進は無言のまま席についた。

「どうしたんだ?悩み」とか?

話しかけてきたのは進のよき理解者でもあり、無一の親友。神楽周だ。
かぐら

「別に…」

「言つと思つた。ま、無理に聞いつとは思つてねえしな」

「なら聞くなよ。そういうや、楓はどうした?」

教室内を進は見渡すが楓の姿はなかつた。彼女は毎年、皆勤賞を狙つて学校へ来ている。しかし、いつも早く来ているはずの彼女がないないと違和感がある。そんな中、周が口を開く。

「さあ? 僕あいつのことなんか興味ねえし?【進と違つて】」「誰が誰に興味あるつて? もう一回言つてみな……」「だから、進と違つて俺は富崎なんか興味ねえの」「へえ、あんたはそういうことを人前で話すのね…」

後ろに何かとてつもない物がいる。そして、周は何事もなかつたかのよつて立ち去りつとする。

「あ～～……、俺トイレ…」

楓はにこやかな笑顔で周の首を掴み教室を後にした。余談ではあるが、その後帰ってきた周の頬には大粒の滴が流れていった。

「ぶつあひまうじ返事を返す進。

「まあ、進?」「なんだ?」

「おまえ、【鬼】つて信じるか?」

「鬼？ 鬼って人を喰う鬼か？ それとも地獄の鬼か？」

鬼という単語を聞くと、猛の言葉が戻つてくる。【殺す】という言葉が。

「いや、種類関係なく」

「信じないこともない……！……！」

突然、進の頭が仰け反る。何かと思ったら先生が投げたチョークが見事に彼の額に直撃したのだ。

「痛つてえ！！」

「進君。次につるやくしたら田に当てるよ」

―――体罰じやねえのか？教員免許剥奪されるぞ？

額をさすりながら、落ちたチョークを拾い先生に返す。

ガタンッ！！！

楓が急に立ち上がった。教室にいた全員は彼女を見ている。そして、彼女はこう言った。

「モウマケルワケニハイカナイ」

「楓さん？ どうかしたんですか？」

彼女に近づいた先生は気づいていなかつた。楓はもう、【戻れない】ことに。次の瞬間に見た色は……赤だった。

2話 狂い

突然大声をあげる進。その声にクラス全員が進を見る。

「どうしたんですか？」

「あれ？ 先生… 今 刺されたんじゃ…」「刺された？ 何を言つているのですか？」

今の、なんだこたんだ？

お前立ちながら寝てたんじゃねえのか?」

混乱している間に周囲に語り掛けた。

今のか……夢か
はと 姉はハサヰにしてだけど

進は手で頭を搔いたから唇は房り
机は突き仇した

力アガハ
逃
癪れてるんじゃ
ないよ】

楓が心配そうに進むに話し掛ける。だが、距離を置いているようにも見えた。

「そうかもな…」

キンコーンカーンコーン

授業終了のチャイムが学校に響き渡る。進以外の生徒は皆、足早に教室を去り剣道場に向かう。

「お兄ちゃん……？ 具合悪いの？ 保健室行く？」

燕奈は剣道場には向かつておらず進を心配していた。

「いや、次体育だろ？ 続けるさ」

「無理すんなよ？ お前が休むとテキストが進まねえからな」

「そうそう」

「あのな…」

仲間たちの心配をよそに進は元気を取り戻していた。そして、周・楓・燕奈・進の4人は剣道場を田指す。

「ねえ」

「ん？ なんだ？」

「今日はさ、竹刀じゃなくて木刀でやつてみない？」

剣道場について楓はとんでもない事を口走った。木刀は剣道場に2本あるが、それは学校の御神木を切つて作ったものなのだ。

「俺はいいけど、先生が許してくれるか？」

「構いませんよ？ 刀は使って何ぼでしょう？」

いつの間にか先生は後ろに立っていた。そして、あっさり木刀の使用を許可したのだ。

「やたつ」

「けど、防具はどうすんだ？ 防具一つもないぞ？」

「防具なんて無しでしょ？ 防具なんてあつたら安心するでしょう？」

楓に違和感があった。それは、いつもの彼女は微塵も感じさせない雰囲気だ。

楓？ なんか変だな……。くそー タフキの楓と少し重なる。

「じゃ、行くよ？ 怪我しても恨まないでね」

「ちょっと待て……俺の木刀は？」

そんなことはお構いなしに楓は袈裟切りを仕掛けてくる。進は紙一重でそれを避け壁に掛けてある木刀を取り自然体になる。

「富崎流 一文字切り廻りの型じゅさりもんじきりまわりのかた」

楓は横に木刀を薙いでくる。進はまたしても紙一重で避けるが彼女は体を回転させ再び木刀を薙ぐ。しかも、体ごと回転しているため遠心力が加わり速さ、力が強くなっていた。

「ぐつ……」

「一撃田は避けきれず木刀でなんとか受ける。しかし、勢いは止まらず進は体ごと吹き飛ぶ。

「まだまだ行くよーー！ 富崎流 龍の太刀りゅうのたち！」

彼女は木刀を下から切り上げ、体ごと上に飛び攻撃を繋げるよう
に木刀を振り下ろしてくる。進は体を回転させ剣撃を避け、木刀の
柄で楓の背中を強打する。

「なかなかやるねー！ けどまだまだだよーー！」

おかしい…。痛みを感じていない？ 仕方ない……。骨を
折つて楓を止める。

進の決断は冷酷なものだった。しかし、そうでもしなければ彼女
を止めることはできないだろう。

「（神薙流） 一の太刀 逆薙さかなぎ 逆一文字いちらもんじ…」

彼は木刀を逆手に持ち楓の攻撃を待つ。この攻撃はカウンター主
体なのだろう。

「そんなことをしても無駄だよーー！」

楓は何も知らずに木刀を振り上げ走つてくる。

「悪いな…… 楓」

ヒュン・・・

メキ・・

・

空気を切る音が聞こえ次に聞こえたのは鈍い重低音。

「なんで……」

楓の腕はありえない方向へ曲がっていた。観戦していた生徒のほとんどはただ見ていていただけだった。

「すこし疲れ……。 楓」

彼女は床に倒れた。

お前はもう【戻れない】のか……。いや、戻れないのは俺か
……。

3話 天使と悪魔

「腕折るとはねー。エグいって言つかなんて言つか……」

「仕方ねえだろ……？ 楓の様子が変だつたんだから」

進と周は保健室に向かっていた。周は楓を背中におぶり保健室へ連れていいくと言い、進は付き添いのために彼についていった。

「なあ……」

周は進の方を向きおもむろに問いかけた。

「おかしくなつた。つて言つてたけど、具体的にはどうなつたんだ？」

「どうつて言われてもな……。【雰囲気】……かな？ 言うなればな

進は雰囲気と答えたが実際にはそんな生優しいものではなかつた。放つておけば人を殺しかねない形相、殺氣、そして殺意。どれも人から発せられるものとは思えないほど強く、危険だつた。そして、二人は三階西口の保健室に辿り着いた。

周は楓をベッドに寝かせ、折れた腕を固定するために木板と包帯を探している。進は、空いているベッドに座り先刻の楓の豹変について考えていた。

——あの日、人間じやなかつたな……。なんか取り憑かれたようだつた……。

「あつた。」れだな

進が考えているのを知らずに周は捜し物を見つけ、寝ている楓の右腕を真っ直ぐ伸ばし腕の外側に木板を密着させ、包帯で固定した。素人目に見ても手慣れた手付きで処置をしていく彼に進は驚いていた。

「これで……終わりっ」

「お前ん家、医者か何かだっけ？」

つい口から出でてしまった言葉。しかし、周の家は医者は一人もない。そのことは進もわかつていた。

「ちげえけど？ なんでだ？」

「いや、骨折の治療をあんな早くするから…な」

「適当だよ。てきとー」

その言葉を聞いて進はベッドから落ちそいつになつた。そして、周は質問をしてきた。

「なあ進？ この地の昔話…って知つてるか？」

「？ いや？ 知らねえ

なにを言つてるんだ？ 彼の頭には疑問が溢れていた。

「昔や、じいじへんつて鬼狼村きろうむらって呼ばれてたらじいぜ」

「きみの……。漢字は？」

「鬼と狼。 今から言ひひとはおとぎ話みたいな話だけど本当の話だ」

進はゴクリと生睡を飲む。外で鳴いていた蝉も、この時だけは静かになつた感じがした。

『昔、この村には天使と悪魔がいた。 天使は人に従い、人を護つた。 悪魔も人に従つた。 しかし、悪魔は負の感情を悦びに変えてしまつた。 だから悪魔に憑かれた人間は同族を殺した。 それを見かねた天使は憑かれた者を殺した。 それが引き金になり人々は殺し合いを始めた。

大人から小さな子供まで。

大人は武器を持ち大人を殺し、子供は石を持ち子供の頭を潰した。 天使派の人は殺すのはよしとしない。 しかし、悪魔派の人は殺すどころか死すらも喜ばしき事だと思つてしまい、自ら死ぬ者も少なくはなかつた。 殺戮は約20年続いた。 それが終わつた頃には両派の生き残りは、一名ずつだつた。 その二名は天使と悪魔そのものだつた。 そして二名は共存ではなく、決別の道を歩んだ。』

「天使と悪魔？ なんか話がおかしくないか…？」
「だけど、これがこの村…」ふたがみむら「二神村の歴史らしいぜ？」

今の話は進には信じられなかつた。いや、村の人間全てに聞いても9割は信じないだろう。

「話に出てきた【天使と悪魔】ってなんなんだ？」
「俺が小さいとき、バアチャンから話だと…」

周は急に楓のベッドの方を見た。なぜか、いるはずの楓がいなかつた。そして、次の瞬間。進の肩にメスが入つてきた。

4話 「あの時かい...」（前書き）

不定期の更新申し訳ありません。
キャラ紹介が後書きに載せてあります。

4話 「あの時かい…」

鏡がみえた

自分がいた

目が違つた

それは 鬼だった……

「進！！」

左肩から血を流している進に向かつて周は叫ぶ。血を流させた楓
は不敵な笑みを浮かべている。

「ふフふフフふふふ

「完全にイッてやがる…。 進ー逃げんぞー！」

周は楓を派手に蹴り飛ばし進を引っ張り保健室を出た。

「にがサな…… イよ

保健室を出た二人はただひたすら走った。周はときより進の肩を見ていた。

「周」

「なんだよ？」

一人は走る速度を落とさずに会話を続ける。

「とりあえずお前は一階に下りろ。俺は屋上に行く」

「わかった。けど、気をつけろよ。楓の奴狂ってるから」

進はそれを聞くとフツ。と鼻で笑つた。そして一人は階段で別れた。

「ま、楓の狙いは俺だからな…。とりあえず、あいつには危害は加えないだろ」

進は階段を上りきった後で呟いた。屋上の扉は年中鍵が掛かっていて開けることは出来ない。しかし、それを知りつつ進は屋上へと来たのである。

「！」なら狭いからな、前からの攻撃しかない

後は一瞬の隙をついて逃げればいい。

息を整え楓を待っている進。しかし、やつてきたのは奇怪な生き物だつた。全身は白の毛で覆われており口には牙、手？には鋭い爪をつけた4足歩行の生き物。

「……【狼】？か？」

純白のそれはしっかりと進を見据えている。そして、一気に間合いを詰め先程攻撃を受けた左肩に噛み付いてこようとする。しかし、進は体を後ろへと倒し巴投げをするような形になり獸を後ろのドアへと蹴り飛ばす。そして、彼は階段を下りさつきとは逆方向へと走った。

あれって、狼か？　だけど【白い狼】なんて聞いたことがねえ……。

必死に走る進だが、後ろには先程蹴り飛ばした獸が追つてきていた。狼と人間。どう考へても狼のほうが速い。

たしか、3階西口の窓の外つて三沢さん家の屋根が近いよな…。いちかばちかだ！！

そう思つた進は窓を蹴り破り外へ跳んだ。しかし、狼は跳んでいる進の足を噛み下へと放り投げた。

「うわっ！――！」

3階、約30mから下へと頭から投げ飛ばされる進。勢いは重力が加わり、計り知れないものになつていた。無論人間などは即死するだろう。

死んだな…。けど、【死にたくねえ】な。

そう思つた時には地面から約5mの場所だった。あと少しで神羅進という人間はこの世からいなくなる。しかし、進は体を反転し着地した。ちょうど猫が高い所から着地するようだ。

「……あれ？」

彼は地面に着地していることを驚いていた。そして、左肩の出血、いや傷痕すら消えていたのだ。

地面に着地する前の記憶がとんでも…。

不思議に思ったがとりあえずは無事なことを確認し彼は校庭に走った。

「いいなら誰もいないし、広いから戦える…」

進は校庭の真ん中へ立ち、先程自分を投げ飛ばした（躊躇飛ばし？）狼を待つた。

「進ーー！」

学校の中から出てきたのは周だった。急いで進のもとへ行こうとするが進は手を前に出し無言で「来るな」と言つた。

そして、遠くから走ってきたのは狼。それを見て周は驚いた。

「あれって、【楓】か？」

その言葉に驚いた進は一瞬狼から田を逸らした。しかし、狼にとっては一瞬で充分だった。風を切るように疾駆し進の腹に体当たりをする。

「な…」

「」の【香つ】……。」につ、本当に楓か？

進が驚くのも無理はなかつた。体当たりをされた時に彼女がいつもつけていた香水の香りがしたのだから。そして、進は勢いが止まらずフェンスに背中を強打した。

「きづ力なカツたの？」

周は狼から発せられた声に驚いた。しかし、進には遠すぎて聞こえなかつたらしい。

「本当に楓なのか？」

「え？。ソ、うよ。いや、せいかクーはチガうわ」

狼は話の途中で進の方を向き直つた。彼はなにやら片手で印を組み何かをやつていた。

「完成。【鬼符・強】（おにふ・きょう）」

古へからの理、破つちまつたな。【身内以外には力を見せるべからず】。

軽くため息を吐き進は札を両足に貼る。

「なにやつてんだ？　あいつ」

周が言い終わるのより速く、進は狼の後ろに移動していた。そし

て、狼を横に蹴り飛ばす。

だが、奴は体を捻り四本足でブレーキをかける。

「なかなかヤルわね」

進は驚き、動きを止めた。

「やつぱりな」

「オビロかなイのね」

二人は距離を空け会話を続ける。

「なんで狼に？」

「こレが私の… イえ、か

「言つな！」

遠くから走ってきた周が狼の声を制止する。しかし、【楓】の声は止まらなかつた。

「【神楽】家の血なんだから…」

「……か・ぐら?」

進は確認するように【神楽】と言つ返す。神楽は周の姓だ。それを楓が言つのはおかしい。

「楓。お前は本当に【富崎 楓】なのか？」

「富崎といつのは偽りの姓。私の本当の名は神楽。【神楽 楓】」

「――神楽 楓。それがお前の…。じゃあ、周とは双子の姉弟か

…。

進の脳内では様々な考えが回っている。しかし、それが隙になり楓の攻撃を喰らってしまった。

進は腹をえぐられ血を吹き出して倒れた。そして、狼は楓の姿に変わった。

「進が私に勝つたあの時から、私は力に目覚めたの。輝かしき【天】の力を」

――てんのちから……。狼が天なら鬼は地か……。

薄れゆく意識の中、進は考えていた。そして、望んでしまった。

――力が欲しい……。

そして、彼の傷はすべて消え、ゆらりと立ち上がった。

「進。…お前、その眼……」

周は目を見開いて進の眼を見た。彼の眼は人の目ではなかつた。蛇のような眼だが根本的に色が違かつた。それはすべてを吸つても色が変わることがないような赤。しかし、ワインレッドのような綺麗な赤ではなく、血のような醜悪。そして、見る者すべてを拒むような色だった。

「……ふ。はハ…ははハハ！！！」

進の姿をした何かは感覚を確かめるように拳を握り、離し、また握る。そして、進の声とは似ても似つかぬ甲高い声で笑っている。

それはまさに戸の世に戻ってきた鬼のようであつた……。

4話 「あの時から」（後書き）

名前：神薙 進（学校内では金木 進）
詳細：年齢は17歳 瞳は黒（豹変時は蛇のような眼で色は赤）
髪は逆立つことは絶対にない色は茶がかつた黒 一応学校内ではリーダーに近い存在 家では鬼を継ぐ者として扱われている

名前：宮崎 楓（本名 神楽 楓）

詳細：年齢17 瞳は漆黒（変身？時は白） 髪はセミロングで黒
進や周達の友達 燕奈には姉的な存在 狼に変身する特異な能力
を持つている

名前：神楽 周

詳細：年齢17 髪は茶で軽く逆立っている 瞳も茶 進の無一の
親友 楓の兄弟 学校内では進と同じでリーダー的な存在 もしか
したら狼になれる？

名前：神薙 燕奈（学校では金木 燕奈）

詳細：年齢11 瞳は黒 豹変？時は右が青で左が銀色になる（理由は不明） 髪はロングの茶（地毛） 兄は進 楓を姉のように慕
つている 周たちとは年齢が離れているがよくしゃべる

小説を読んでの感想・評価。お待ちしております。書いてください
と意欲がわくので…

5話 鬼の力（前書き）

更新が遅れています。

5話 鬼の力

「ふう……」

進：いや鬼は息を吐き、楓に視点を合わせる。

——来る……

彼女は攻撃を予測し、白狼に変化する。そして、前を見直すがそこには鬼はいなく、彼女の後ろで右足を振り上げていた。

——速い……！

なんとか前に飛び、避ける楓。そして、鬼がいた方向を振り向くが姿は見えない。鬼はまたしても彼女の後ろにいた。そして、空中にいたため楓は鬼が放った蹴りを避けられず真横に飛んだ。

「くつ……」

なんとか着地した楓は鬼を見る。今度は鬼は移動してあらずそこに立っていた。そして、鬼は信じられないことを口にした。

「まあ、【2割】の力だな……」

「に…2割！？」

「まさか、あれが本気だと思ったか？ 笑えぬ[冗談はよせ]。 次は5割だ」

そう言つた直後、楓の体が後ろへと飛んだ。そして、飛んでいる彼女の体は前へと跳ねた。彼女はまるで小さい部屋で力いっぱい投

げつけたスーパー・ボールのように体が跳ねている。前へ、後ろへ、横へ、上へ。

「ぐつ！ ガツ！！」

鬼はその場から動いていない。いや、実際は動いているのだろう。ただし、有り得ない速さで楓を殴り飛ばしまた同じ場所へ戻る。と、いう行動を繰り返しているのだろう。

鬼の暴虐が終わる頃には白狼の毛は赤く染めあがっていた。

「ゲホッ！！」

――まだ……まだだ。私は……力を……。

楓はいつの間にか人間に戻っていた。びつやう、肉体や精神に危険が生じた場合は強制的に変化が解けるらしい。

鬼はにやりと笑い彼女に近づく。もはや、誰が見ても勝負はついていた。

「血をくれよ」

「おま……えに、や……る血は……ゲホッ！……一滴もない」

「やうか。じゃあ、【餌玉】をもらひつい

そう言つと鬼は楓の右目に指を伸ばす。びつやう鬼にとっての【餌玉】とは【眼球】のことらしい。

指が眼に触れる直前、鬼の頭に野球ボールが当たる。それを投げたのは周だった。

「進……もうやめぬ」

周の言葉に鬼は蛇のような赤い眼を見開いた。

「残念だな。ここに進という人間はない。いるのは……鬼だ
！！！」

言い終わるとほぼ同時に鬼は周めがけて手を前に突き出す。そして、彼は腹に衝撃を喰らい後ろへと吹き飛んだ。

「ぐだらん…」

そう言ひついで、鬼は校庭のほぼ真ん中に立ち拳を振り上げた。

「！」の後の光景を見ていろ……。これが、鬼の力だ

そう言い放ち鬼は地面に拳をぶつける。すると、殴られた地面は鳴り響き巨大な（約40m）クレーターが瞬時にできた。

「限界か……」

「ん…」

浅い気絶をしていた周は目を覚ました。そして、目に入ってきた光景に目を丸くした。

「嘘だろ…」

彼が見た光景は、校庭がまるで爆弾でも爆発したのかと思わせる

ほど巨大なクレーターだった。彼はクレーターに近寄り、中心部をのぞき込む。

すると、中心には仰向けの状態で進が倒れていたのだ。彼は意識がなく危険な状態に見えた周は急いでクレーターの中心部を目指す。

「たく
…」

軽くぼやきながら進を背負い、クレーターを上っていく。

そして、校庭に横たわっている楓も背負い保険室を目指した。

6話 周と楓

「これでよし」

二人を背負い保険室まで来た周は、一人をそれぞれ違うベッドへ寝かせた。

「楓も力に目覚めたのか…」

——じゃあ、これで【全員】が力に…。

彼が考えているときに楓は田を見ました。そして、彼女の体を見た周は田を見開いて驚いた。それは彼女の傷がすべて癒えていたのだ。

「使ったのか?」「

「ええ。【私の力】って体力を犠牲にするらしいの…」

一度は起きあがつた楓だが、体を支えきれずにベッドに倒れた。それを見た周はゆっくり立ち上がり楓に近づく。

「ダイジョブか?」「

「少し無理…。ねえ、しよう…。」「

「いいでか?」

周は少し慌てて周りを見る。そして、誰もいないのを確かめ楓の方を向き小さく頷く。

「じゃ、早くね…」

「はいはー…」

そう言い一人は唇を合わせる。しかし、楓は動けないので正確には周が楓に口づけをする形になつていて。

「んっ……」

甘い声を漏らす楓。しかし、そんなことをよそに周は舌を絡める。彼の舌が彼女の口腔を一巡すると、彼は唇を離した。

「終わりだ」

「ありがと。わざよりは楽になつた」

そう言つと、楓はベッドから体を起しす。そして、進を見る。

「ねえ…」

「なんだ？」

「進つて本当に【人間】なのかな？」

その言葉に周は反応した。蛇のような眼、楓を躊躇なく殺そうとした姿、そして人間とは思えないほどの力…。どれもいつも進なら考えられなかつた。

「さあな。けど、こいつが人間だらうが【鬼】だらうが関係ねえ…。こいつは…進は俺たちの友達だろ？」

友達。その言葉を聞いた楓は微笑んで進の額を撫でた。

一方、進はまるで死んでいるかのように眠つてゐる。

「けど、【鬼】ってなんなんだろ？」

楓は撫でていた手を止め周を横目に見る。

「それはわからんねえ。ただ、俺ら【狼】と対の存在ってこと以外はな」

「【鬼】と【狼】か…。【鬼】ってどんな力を持つてるのかな?」

彼女は少し笑みを浮かべて進を見ている。

「さあな…。只、得体が知れない力だ。俺ら【狼】は力に目覚めるとともにその力のすべてがまるで昔から知つてたような感覚になる。しかし、力を制御しなきやいけないけどな。だが、それが【鬼】にあるとは思えない

「なんでそう言こられる?」

楓の質問に少し悩む周。

「これは憶測にすぎないけど……、おまえが気絶してすぐに俺は進に【やめろ】と言つた。けど、あいつは止めるどころかこう言った。【ここに進という人間はいない。鬼だ】と。だから、な

「つまり、早い話が鬼が体を支配するってこと?」

「多分な…」

「有り得ない!…じゃあ、進の体には一つの命が入ってるってこと!?」

楓が周に叫ぶ。しかし、それでも話の中心になつてている進が目を覚ますことはない。

「有り得ない。って言うなら俺らも【有り得ない】ぜ?人間から狼になれる力。その一人一人に与えられる特別な能力。違うか?」

「た、確かにそうだけど……」

急に静かになる空間。

「とりあえず楓、寝とけ。力の代償が体力だとキツイだろ」

「そうだね…。おやすみ」

そう言い彼女はベッドに横になり眠りについた。そして、周は椅子に座り背もたれに寄り掛かり天井を見上げた。

——このまま進が目を覚まさなかつたら、楽なのに……。

残酷なことを考える周。彼はいつの間にか窓の近くに立ち景色を見ていた。

「【血】か……」

周は進を見て呟いた。

第3章 1話 暴力

いつからだろ？死を望んだのは

いつからだろ？生を拒んだのは

それはわからない　だって私は鬼なのだから……

静かな空間に静かに眠っている進。

彼は呼吸音すら聞き取りづらいほど静かに眠っている。保険室には先刻まで周と楓がいたが朝になつたので家に帰ってしまった。

「ん……」

何かに反応し進は体を起こして目を開く。

「あれ？」……

彼はまだ、自分がどこにいるかわかつていない。周か楓がいれば説明しだらうが。

「保険室か？頭痛でえ……」

両手で頭を押さえる進。相当な痛みなのだろう、顔も苦痛でゆが

んでいる。

「今、何時だ？」

ベッド横に置いてあつたバッグから携帯を取り出し時間を確認する進。そして、今の日時は。

06／07／29（土） 10：49

「約一日寝てたのか…。しかも保険室に」

——なんで寝てたんだ？まあ、いいや。とりあえず帰ろ。帰つたら父上に平謝りだな…。

深くため息をつき鏡で寝癖を直し、彼は学校を後にした。

——さすがにこんな昼間から制服着て歩いてると周りの人見られるよな。

そんなことを考えながら家へ帰る道を一人で歩く進。そんなとき、目に止まったのが一人の不良とそれにからまれてる楓の姿だった。

「ネエチャンよおー！人にぶつかって誤りもしねえつてじうじうつもりだオラアー！」

——まだいたのか？あんな時代錯誤の不良。しかもなんでポケットにスタンガン隠してんだ？バレバレだけど…。

からんでいる不良は誰が見ても不良とわかるほどだつた。休みの日なのにも関わらず長ラン（学ランを長くしたもの）を着ている。それに髪型も今する人は皆無に等しいリーゼント。

「そんな…、あなたたちがぶつかってきたんじゃないですか……」

やけに女の子っぽい楓。それを見て進は苦笑いをしている。もちろん楓のはるか後方から。

——面倒くさいが助けてやるか。

そう決めた進は楓に近づき肩をポンと叩いた。

「よつ」

「す・進！？なんでーじこひ？」

相当驚いている楓。この道は進の帰り道なので通るのは当たり前だ。

「細かいことは気にすんな。助けに来た」「んだとアラア！！！はつたおすぞ！！？」

——男にはつたおされて嬉しい奴はいねえよなあ…。例外を除いて。

隠し持つたスタンガンを進の腹めがけて突き出してくる不良の一人目。二人目はまだ動いていない。

それを確認した進は突き出してきた手を右足で上へ蹴りあげ、体を回転させ蹴りあげた右足が地につくと同時に左足を不良の鳩尾にみぞおち

繰り出す。

不良は豪快に後ろへ倒れ、まだ移動していない不良に助けを求めている。

一方、助けを求められた不良は倒れた男の秘部を踏みつけた。男は体をビクンとさせ、動かなくなつた。

——うわ……。【あれ】は効くだろ男にとつては……。

軽く男に同情する進。しかし、そんなことも束の間。不良はどこからか木刀を取り出し進の頭めがけて振り下ろす。

彼はギリギリ避けて、バックステップを踏んだ。事実、後一瞬避けるのが遅れていれば彼の頭は頭蓋骨もろとも粉碎していただろう。

——あつぶな……。あんなの防具付けてても重傷だぞ！？まあ、今喰らえば死ぬな……。怖つ……。

間合いを空ける進だが不良は剣道の経験者だらう。一気に間合いを詰め、首に突きを当てる。

進はなんとか紙一重でかわす。しかし、避け続けるのも無理があるだろう。そう考えた進は自ら前に出た。

——多少は痛いが心（刀の重心部分より前方の事）さえ外せば

……

木刀が進のこめかみに当たつた。振り下ろすと思っていた一撃目は柄の部分を使った不意打ちに近い攻撃だつた。当然、至近距離にいた進は避けられずに木刀を喰らつた。だが、頭は横に逸れたが彼は体勢を低くし不良の腹に渾身のボディブローを浴びせる。

「ぐ……」

両膝を折り地にうずくまる不良。周りを見ると一人目の不良はもういなかつた。

「すごいよー進。不良を一人も倒すなん……て……」

楓が進に近づこうとしたが足を止めた。理由は明白だつた。彼はうずくまる不良に更に攻撃を加えていた。それも、木刀で。

「ガツ！－ギツ！－やめで！－！ぐだ！－！」

不良が謝っているのにも関わらず進は止めない。それどころか、更に力を加え叩く。

メキッ！－！
ゴシャ！－！
ブシ

ヤ！－！

不良の骨が折れても、血を吐いても、意識を失っても彼は不良を叩き続けた。木刀の先端は赤黒く変色していた。

「進！－もうやめて！その人はもう大丈夫だよ！－！」

楓が進に抱きつき制止する。彼は木刀を手放し、こう言った。

「【羨ましい】…
「え？」

そう言つた後、彼はバッグを片手に持ち家に帰つた。不良を殺しかけた場所から数m離れた場所で彼はいつたん振り向いた。そして、

楓はその田を見逃さなかつた。

「あの田、【昨日と同じ】……」

彼女は、ただ静かに歩く進に恐怖しか感じなかつた……。

「家か…」

進は家の門の前にいた。しかし、彼の記憶にはこれまでの道の記憶はなかった。

——どうして帰ってきた？

彼は家までの記憶を必死に思い出す。しかし、思い出すことはできなかった。

入り口の前で考えている進だったが門が勢いよく開き飛び退いた。そこから出てきたのは進の父、猛だった。

「進か…。なぜ昨日…いやいい。入りなさい」

——なぜ怒らない？いや、これはこれで幸運だな。

そう考えた彼は小走りで父の後をついていった。

猛の言葉に心から驚いた進だが冷静に振る舞い事情を聞く。

「進、妻が…恵が消えた」

「…消えた？どうして」とですか？」

「今朝、あいつを起^{けさ}こじていた。何故か今日は起きていなかった

からな。そして部屋を見たが…」

「そこは最早、蛇の空だつた?」

猛は頷く。

「朝早くに外出した。というのは?」

「靴も草履もしつかりあつた」

二人は軽くため息をつく。そして、なにかを思いついたように進は顔をあげた。

「それ以降は父上は部屋には入られたのですか?」

「いや…部屋の入り口から見ても何も変化は見あたらなかつたから、入つてはいなが…」

「では行きましょう。母上の部屋に」

そう言つと進は猛の腕を引き恵の部屋に向かつた。

恵の部屋は良く言えば綺麗に片づいている。悪く言えば殺風景な部屋だ。進と猛は入り口から中を見渡し、安全を確認した後、部屋に足を踏みいれた。

「別に代わりはないが…」

「…ですね」

部屋の中を見渡す一人。しかし、進は右足に違和感を感じ床を触つた。

——なんだ？　ここだけ感触が違う。

彼は違和感のあった場所を指でたどつていく。下へ、数回行つた所を右に。右に少しだけたら上へ。下にたどつた長さと同じ長さに行つた所を左に。

たどつていくと彼の指はある一つの形を作り出した。

——この形…。もしかして…

彼は片手で印を組んだ。そして出来た鬼符を指でたどつた箇所にはめる。

「やつぱり…。父上…来てください」

「どうした？」

疑問の顔を崩さずに猛は進に近づく。

「こ…。符を貼つた跡があります」

「何…？　何の符かわかるか？」

「いえ…、私の力ではそれは…」

——仕方がないか…。

そう思つた猛は進を下がらせ符が貼られていたらしい場所に左を当て右手で印を組んだ。

すると彼の左手は光り、鬼符が出来上がつていた。

「【鬼符・結】か…」

「【結】…。結界？」

【鬼符・結】は結界の力を使う札。札の枚数に比例して強度も強くなるという特別な札。それを恵が使えるのはおかしかった。彼女は一昨日まで【強】しか作れなかつたからだ。大人ともなれば精神は劣化していく。つまり、符は作れないのが眞実なのだ。

進は周りを手探りで探す。すると、中心とする部分が一枚。それの数十cm離れた所の四角に一枚ずつ、計5枚の符が貼られていた。

「はあ……はあ……」

肩で息をする猛。5枚の符を作ればかなりの精神が削られるだろう。それでも死なないのは彼の精神力が高いためだろう。

「【結】が周りに4枚。【移】が中心にある。これは……【四陣動結界】（じじんどうけつかい）か」「【四陣動結界】……」

【四陣動結界】とは【結】の符を四方に貼り、その中心に【移】の符を貼り安全に転移する方法だ。

——母上の精神力で二つの符を作れるのは無理だ……。

そんな考えは、猛の声で書き消された。

「進。用意をしたら行くぞ」

「……はい！」

用意と言つても進はなにも用意するものがなかつた。そのため、彼は父をただ待つていた。

用意が完了した二人は結界に入り移動した。
猛は進に聞こえないように呟いた。

「息子は守つてみせる……！」

猛は腰に掛けた刀に手を当て、進の方を向き更に呟いた。

「この刀はいづれ継承させねばな……」

「エリは？」

恵の部屋から移動した場所は暗い洞穴のよつたな場所だった。

「喋るな…。誰かいる……」

進の問いに答えず、猛は軽く腰を落とし、刀に手を添え居合の形になつた。

——誰もいないよくな。

次の瞬間、猛が進に居合切りをしてきた。刀は空を切る音すら聞こえないくらいの速さで進の首をはねた。……はずだつた。

「な……！」

猛は驚いている。当たり前だろう。首を跳ばしたと思つた息子が彼と背中合わせに立つていた。

「どうこいつもつですか？ 父上…」

進は表情を変えずに問つ。しかし、心内では疑惑が浮かんでいる。

「わかるだろ？ お前は人ではない【鬼】だ

鬼という単語に進は目を見開き、過度に反応する。しかし、猛は話を続ける。

「まだお前は不完全なのだ。だから、今の内に……殺す」

そう言つと彼は刀を鞘に納め、再び居合いの形をとる。彼の殺気が辺りを覆う。

——なんて殺氣……。一瞬の隙を衝いて逃げる。父上にはどうやつたってかなわない！

彼の考えは正しかつた。実際、正面から戦えば勝ち目はないに等しいだろつ。

「いぐぞ……我が一族の、呪われし業の塊よ……」

猛は居合い切りを地面と水平に放つた。しかし、進は体を低くし剣閃を避け、後ろを振り向き必死に走つた。

「逃がさん！」

猛も後を追う。進は逃げながら考えていた。

——父上が俺を殺すのは納得できる。大きすぎる力は災いをもたらす。けど、納得いかない事がある。母上はどうなつた？ わざわざ俺を殺すなら食事に毒でも盛つた後に庭に埋めればいいだけなのに……。【母上を探す】なんてことは要らないはず……。考えられるのは……。

考えを巡らせているが猛の剣撃を避けながらでは限界があつた。

「くそ……！」

考えを巡らせているが猛の剣撃を避けながらでは限界があつた。

「くそ……！」

——戦うしかないのか？ だけど、相手は刀。こつちは素手！ 戦い方が難しそう。

彼はそんな考えを巡らせながらも片手で印を組んでいる。

「せん！」

猛は袈裟切りを仕掛けてくる。しかし、進は体を捻り紙一重で避ける。そして、符の形成を終わらせた。

「完成…。【鬼符・爆】^{ばく}」

完成された符は猛の一歩前に張り付き、爆発があきた。爆風で猛は後ろへ吹き飛んだ。

「ぐつ！ 忌まわしき【鬼】め…！」

猛は体勢を屈め吹き飛ばされた勢いを殺した。進はその隙を衝き、瞬時に間合いを詰め攻撃に転じた。

「神羅流舞術
連舞双掌破！！」
れんぶそうじょうぱ

進はまるで踊っているように攻撃を繰り出す。右足の上段蹴りから体を回転させ左足の足払い、そして猛の横腹に右フックの後には両掌で腹を攻撃した。

「なに…！」

猛はすべての攻撃をまともに喰らい、刀を手から滑り落とした。

彼は急いで取るつとするが、進に額を蹴られ後ろへと跳んだ。

――よし……。

進が刀を手に取った瞬間、空気が弾けた。弾けたそれは刀を中心
に波紋のように広がった。

「儂は一体…、進！」

進は猛が近づいてきたため、反射的に体が動いた。刀の先端を猛
に向けていたのだ。その行動に猛は驚いていた。

「進…！　何をするのだ…？」

「あ、すみません…」

とつさの行動に進は自分でも驚いていた。

――やはり、【後催眠暗示】…。多分ここに来ることで催眠が
始まつたんだな。

後催眠暗示とは、一度なんらかの形で催眠をかけ覚醒した後に催
眠時の指示通りに行動をとらせる暗示だ。

――けど、あの言葉は…父上の本心なのかもしれない。元来、
【鬼】は恐れられてきたみたいだし……。

「進。先へ行くぞ」

猛は進が考えていることをよそに先へ進んだ。

一方、進は落ちてある鞘を拾い刀を納めた後、父の後を追つた。この時、進は知る由もなかつた。この先に待つてするのが【惨劇】という運命に……。

4話 赤の瞳と黒の翼

「なにもありませんね」「うむ。しかし油断はするな」

進は軽く溜め息をつき父の後ろを歩いている。一人がだいぶ歩くと広い空間が目に入った。そこは、なにかの儀式でもするような空間だった。周りの壁には灯がともっており真ん中には階段。そして、そこを登りきったところに見えるのは大きな羽を広げた鳥の像。二人はその像を見上げている。

「これは……鳥？」

「そのようだな。そうすれば、ここは【鳥族】の洞窟か？」

「【鳥族】とはなんですか？ 父上」

聞きなれない言葉に戸惑う進。しかし、問い合わせの返答が返ってくることはなかつた。それは、なにかの衝撃で二人は左右に吹き飛ばされたからであつた。

「な！－」

「くそつ－－！」

刀を…！－ しまつた！ 進に預けていたままだ。

猛は飛んでいる体を回転させ壁に足をつけ衝撃を緩和した後に着地した。

一方、進は背中から壁に当たり衝撃を直に喰らいなんとか着地した。しかし、ダメージは残っているため足取りがおぼつかない。

「死ななかつたか……。無駄に丈夫な体じやの
「！？」

進は像を見上げた。そこには、背中から黒い翼を広げた母の姿があつた。

「……母上？」

「母……か。なんとも嫌な言葉よ」

「恵……貴様、鳥族だつたのか……？」

「見てわからぬか？ なんとも愚かな……」

状況を理解できない進だが、猛は理解していた。恵はもともと鳥族の人間だったのだ。それを隠し通し神羅家の嫁になつた。ということだわつ。

「貴様……許さん……！」

猛は怒りをあらわにして恵に突つ込む。その眼はもう周りなど見えていなかつた。

「ふん。見苦しい……。朽ち果てよ……！」

恵はそう言うと翼を羽ばたかせ突風を巻き起こす。猛は当然防ぎようがなく後ろへと吹き飛ばされた。そして、恵はその風に乗つているかのような動きで猛との間合いを詰める。

「終わりじゃ……。我が愛した夫よ……！」

彼女はどこからか刀を取り出し猛の心の臓を一突きした。彼の胸からは赤い血が流れ、そして彼は両膝を折り力なく倒れた……。

「父上……！」

なんとか体が動くようになった進は急いで猛のもとに向かった。そして、猛の体を起こし必死に叫んだ。

「進か……？ よく聞け……」

「もう喋らないで下さい……！」

「お前の中にある【鬼の力】は3割程度なのだ。後の7割はわしが……封印している。自分の命が朽ちるまで……な

猛が何を言っているのか進にはわかつていなかつた。そして、猛は自分の上着を脱いだ。

「それ……は？」

「これが……封印の術式だ。自分の体に力を入れることで……その力を自分の物にで……きる。だが、わしは【鬼の力】を使……うことができなかつ……ゲホッ！！」

彼の喉には血が混じつてこる。もうこの世にいられる時間は少ないだろう……。

「そして、わしが死ぬことで【力】はお前に戻る。そして、鬼を使う際は……」

進はただ聞くことしかできなかつた。父の【最後の言葉】を。

「【望む】ことだ……」

その言葉を最後に神羅 猛はこの世を去つた。進は彼を横にして、

静かに寝かせた。

「ふ……馬鹿な男だ。このような息子に何を託したといつのだ？」

恵は高笑いをしている。しかし、その笑いはすぐに消えた。

「お主、その目は……」

彼女は進の目を見て驚いている。彼の双眸は赤く、まるで血のよう無氣味に光っている。

「俺はあんたを殺す……。力を貸せ【鬼】……」

驚いたことに彼は目が赤くなっていても、意識が消えていなかった。

「【覚醒者】……」

恵は翼を広げ上空に飛び上がった。進はただそれを見ているだけではなく、腰にある刀に手を掛けた。

「神薙流剣術 参の太刀 三爪痕さんそくげん」

彼は刀を振り上げ、遠くにいる恵の掛けて刀を振り下ろした。振り下ろした刀の剣先からは三つの衝撃が出て、恵を襲った。

「なに！？ きやあああアアアアア……！」

彼女は悲鳴を上げそのまま地に落ちた。落ちた瞬間、彼女は潰れ血をばら撒いた。

血の惨劇の場に立っているのはただ一人の鬼だけだった。

5話　一つの終わり、一つの始まり（前書き）

更新が遅れてしまません

5話 一つの終わり、一つの始まり

「父上……母上。どうか、安らかな眠りを……」

進は一人に黙祷を捧げ、部屋を後にする。

「さて……これからどうするか?」

——まずは家に帰るか……。

考えがまとまると彼は印を組み始めた。

——構築式形成……、圧縮……。空間符作成……、構築式注入……。

頭の中で符作成のプロセスをたてる。しかし、両親が一変にいなくなつたため顔には出さなくても彼の心は揺らいでいた。そのためには彼は符が作れなかつた。

——くそ…… なんでだ!?

進は符が作れない理由がわからないでいた。彼が悩んでいる時に妙な視線を感じ、足を肩幅に開き腰の刀に手を添える。

「よくも頭首を……!」

背中に羽を生やした男や女が空中から急降下して進を襲う。

しかし、彼の神経はまるで針のようट研ぎ澄まされており拳や蹴りをすべて避ける。

「俺を襲つた自分を恨んでくれよ……」

そう言つと彼は、鳥族の人間を上半身と下半身をまつぶたつに切り裂いた。

切り裂かれた人間は悲鳴すら上げずにただ地に落ち、動くことはなかつた。

「【鬼】の分際でよくも誇り高き鳥族を！！！」

「仕方ない…。殺らなきゃ俺が殺られるんだからな」

鳥族は反撃の余地を「えないよう」に完璧な連携を繰り出す。進は反撃は出来ないものの全ての攻撃を避ける。

「ちまちま戦つても埒があかない…。行くぞ…！　【鬼】よ…！」

そう言つと、1人の鳥族が急降下して進の首を狙う。

【鬼】…。なんでそこまで【鬼】に、いや…俺に固執するんだ？　仕方がない…。力をよこせ。【鬼】…！

進の双眸が赤く、不気味に輝く。そして、鳥族を待ち構え刀を振り上げる。

「覚悟！！　鳥流空術　空刺！！」

鳥族は爪を立て進の首目掛けて突き立てる。しかし、彼は刀を上段に構えたまま動かない。

「我流　鬼の太刀　鬼爪…」

彼の首に爪が当たる寸前、進は振り向き刀を振り下ろす。すると、鳥族は縦に一回切られただけなのに縦に3分割された。

「鬼の爪は一振りで人間を三つに裂く…」

残酷に言い放ち、刀を構え残りの鳥族を待つ。しかし、彼らは進を襲わず先程まで進がいた部屋に帰つていった。

帰るか…。

彼は符を作り、妹が待つて居る我が家へと帰つた。

第4章 1話 「何がしたい…」

あなたを愛す あなたを守りたいから

あなたを愛す あなたを抱きしめたいから

愛するから 私はあなたが憎い…

だつて 愛と憎しみは 表裏一体なのだから…

猛と恵が死んでからちょうど一ヶ月がたつた。進は燕奈が好きだった薔薇の花束を右手に持ちある場所へ向かっていた。

「お前が死んでもう一ヶ月もたつた。早いもんだな…

墓地に薔薇の花束を置き独り言を呟く。その墓標に飾られていた名は…

「なあ、燕奈。お前は人間だつたのか？」

不思議な言葉を残し進は墓地を後にした。

家に帰ってきた進は家の中には入らず屋根にのぼり仰向けに寝た。

「俺、何がしたいんだろうな？ 親父が死んで母さんを殺して、拳句の果てに燕奈まで殺しちまうんだもんな…」

彼の心中は空虚だった。何も考えられずただ空気のように流れれる。今の彼は【人形】そのものだつた。

「進」

そんな時、家の外から彼の名を叫ぶ者がいた。楓だ。隣には周も立つてゐる。

「屋根にいるのぼってここよ」

ぶつきらぼうに返事を返し彼は一人が来るのを待つてゐた。

「なんでこゝなどこにいんだよ？」

周が先にのぼつて進に質問をする。

「別にいいだろ」

返事を返す進だが、その姿にはどこか寂しいものがあった。

「ねえ進。あんた何から逃げてるの？」

楓の質問に進は頭に疑問符を浮かべる。

「どういつ意味だ…？」

「そのままの意味だよ。あんたは何から逃げてるの？ 殺人という罪？ 孤独という悲しみ？ 思い出という憂しさ？ あんたは何から逃げてるの？」

「別に何からも逃げてねえ…」

進の答えに楓は怒り彼の胸倉をつかむ。

「嘘よ！… じゃ、何その態度！？ いつものあんたらじへなりなさいよ！…？」

進は彼女の怒りにも動じず据わった目で彼女を見る。

「やめろよ楓」

「周は黙つて…！」

周の制止を振り切り、彼女はなおも怒りのボルテージを上げていく。そんな中進が口を開いた。

「見つからないんだよ何も…。俺は何をしたいのか。俺が俺なのかすらわからないんだよ」

「どういう意味だ？」

進の答えに周が食いつく。

「お前ら【狼】族は自分が何者なのかわかつてんんだろ? けど、俺。つまり【鬼】族はわからないんだよ。自分が人間なのか鬼なんか……」

「それじゃあ、あんたはそれをずっと悩んでるの?」

「悩んでないさ。答えを出したくないだけだ。これがお前の【口】逃げてる】ってことに繋がるか?」

微笑しながら話す進。しかし、次の瞬間その笑いは消し飛んだ。周が彼の顔を殴つたのだ。楓が彼の胸倉をつかんでいたおかげで進は屋根からは落ちずにすんだ。

「ふざけんなよ……」

「ふざけてねえ。」これが俺だからな

「お前、変わったな……」

周は怒りを押し殺し進に呴ぐ。しかし、その呴きを聞いた進は笑つた。

「ハハ・。変わった、か。そつかもな……」

周の怒りは限界だつた。しかし、彼は拳を握り締めるだけで何もしなかつた。そんな中、進はある提案を思いついた。

「このまま話し合つても意味ないだろ? いっそ、剣で勝負をつけないか?」

「この提案に賛納得し、屋根を下り進の家の道場に向かう。

「俺の【力】、見せてやるよ。楓。周……」

2話 燕奈（前書き）

更新がだいぶ遅れています。すいません

2話 燕奈

「 こじが家の道場だ」

進は楓と周に道場を案内する。

「 デッケエ…」

「 ホント…」

道場のあまりの大きさに一人は驚嘆の吐息を漏らす。しかし、進はそれを無視し一人で道場に足を踏み入れる。

「 …こじに入るのも一ヶ月ぶりだな。血の痕は……まだ残つてゐるな。当たり前か、拭き取つてないから染み付いてやがる。」

彼は道場を見回し思い出していた。【燕奈を殺した時】のことを。

「 ふう…」

あたりを見回すとそこは自分の家の道場。進は【鬼符・移^い】で帰つてきたのだらう。

「 …これからどうするか…」

「 兄様！…！」

道場の入り口から涙を浮かべ走ってくるのは燕奈だ。それを見た進は片膝をつき燕奈を軽く抱きしめる。

「どうに行つてたのですか！？」
「『めんな…』

彼は悩んでいた。両親の死を告げるかどうかを。

「そういえば、父様と母様は？」

聞かれたくない質問が来た。彼は妹を傷つかせないようこしたいと思い苦し紛れのうそをつく。

「一人は帰るのが遅くなるって
「ウソ」

妹の言葉に体を硬直させる進。

「な・なんで？」
「ナンデ？ カンタンナコトヨ」

燕奈の様子がいつもとは違う。それは、【あの時】感じた違和感があつた。開かずの間の時に感じた違和感が。

「チノニオイガスルモノ。ナンニンコロシタノ？」
「燕奈？」

燕奈は進を突き飛ばし立ち上がる。突き飛ばされた進は尻餅をつく。

「……。……」

左肩に痛みを感じ手で押さえる進。彼は服から血がにじんでいる。まるで、皮膚だけを切られたよくな。

「アハハハハハハハハ！……！」

狂ったように笑う燕奈。彼女の瞳は【あの時】のような眼だった。右目は青、左目は銀色に。

「……燕奈……。待つてろ……！ 必ず助けてやるからな……！」

腰の刀に手を添え、居合の構えをとる。しかし、腹部に激痛を感じ両膝を地に付き前に倒れる体を両の手で支える。

「……なんだ!? 今……。

「イマノ? イマノハワタシノノウリョク【ザン】ダニ?」

「……ぎん?」

肩で呼吸をしながら燕奈に聞く。相当な痛みなのだけれど。顔も苦痛に歪んでいる。

「シラナイノ? ワタシハ【鳥】族ト【鬼】族ノ血ガマザツテイルノ。ダカラワタシハ【鳥】族ノノウリョク【斬】ガツカエルノヨ」

血が混ざっている。その言葉に進は困惑した。自分は純粹な【鬼】なのに、妹にはなぜ【鳥】族の血が混ざっているのか? と。

「……！ そついえば……俺が小さい時に父上に聞いたことがあ

る。燕奈には秘めたる力がある。それを【管理】するのがお前の役目だと。つて。

「へ…。ソウイウコトダッタノ。チチウエハワタシノコト、トウノムカシニキヅイテイタトイウコト…カ」

燕奈はまるで進の心の内を読んでいるかのように独り言をつぶやく。否、【読んでいるかのように】ではなく【読んでいる】のだ。

「…小細工は無用か…。なら……」

進は地面を強く蹴り燕奈との距離を縮める。だが、燕奈は一步後ろに飛び退き右手を前に突き出す。すると、進の額が横一文字に切れそこから血が噴き出す。

「…」

彼は縮めた間合いを開け額を腕で拭う。しかし、額は少しの切り傷でも派手に血が出るため拭いても意味はない。

「ドウシタノ？ オーライチャン」

燕奈は右手を突き出したまま動かない。しかし、進の体は徐々に切り刻まれていく。右腕から右足。横つ腹、背中と。

「アハハハハ…！ アハハハハハハ…！」

燕奈の笑い声だけが二人だけの道場に響く。進の体は赤に染まり、彼は床に力なく倒れた。

……あれ？なんか前にもこんな事あつたな……。ああ、あれは父上ともめた時だけ……。眠い……、血を流しすぎた……な。

「デウシタノ？ モットアソボウオーライチャン？ アソボウヨオ！
！――！」

そう言つと、彼女は兄の首、頸動脈あたりをなんども斬り始めた。
なんども。なんども。

その内に進は意識をなくし眠りについていた。

……來い…………【鬼】。

「アハハハハハハハ…。 ! ! ! ! 」

燕奈は何かに驚き進との間合いを大きく空ける。一方、進の体はゆっくりと立ち上がる。

「ふう〜。この世に戻るのはおよそ600年ぶりか…。相も変わらず醜い」

ゆっくり立ち上がった【それ】は燕奈の方向を振り向いた。姿を見られた燕奈は両手を前にかざし立ち上がった【それ】を殺そうとする。

「無駄だ。私は力を取り戻した。我にかなうものなどこの世には居るまい…」

そう言つと、【それ】は地に落ちていた刀を取り鞘から刀身を引き抜く。引き抜かれたそれはこの世のものとは思えぬほど黒く、不気味に輝いていた。

「久しいな。【鬼刀・神羅】よ…」

きとう
しんなぎ

- - - ナンデ！？ ナンデ斬レナイ！-！-！

燕奈は必死に【それ】を斬ろうとしているが【それ】は斬れない。

「行くぞ。呪われし【混血の子】よ…」

黒い刀が不気味に輝いた。

3話 進の決意

どうか泣かないで　あなたが悪いわけではないのです
どうか泣かないで　あなたが泣けるわけがないのです
だつて　あなたは既に　死んでいるのだから

だつて　あなたは俺が　殺したのだから…

「ノロワレシ！」　「ワタシガ？」

突き出していた両手を下ろし燕奈は問い掛けた。

「ああ、そうだ。お前は一種族の血が混ざっている【混血の子】なのだ

進の体を支配している鬼は冷静な声で言つた。

「ソウ…。テモカソケイナイ！！！　ワタシハ、オマエヲロス！」

「！」

彼女は右手を上へかざし空中から刀を出現させる。

「【斬】を應用した…いや形に留めた刀か。殺傷力はありそうだ」

鬼は燕奈が出現させた刀を見て冷静に分析している。

「クラエー！ 【斬空閃】！…！」

燕奈は刀を横に薙いだ。当たるはずもない斬撃は空気を切り、一種の【カマイタチ】を発生させ鬼の体を切る。はずだつた。しかし、鬼は自分の刀の切つ先で地面を軽く叩く。すると、たつたそれだけで燕奈が作り出したカマイタチは空氣中で爆ぜた。

「…！ マダマダ、【斬空閃・連】！…！」

燕奈は諦めずに刀を何度も横に薙ぎカマイタチで鬼を切ろうと試みた。しかし、結果は先程と同じ。数多のカマイタチは皆、空氣中で爆ぜるばかり。

「ナンデ！ ナンデ！？」

「力に溺れた【混血の子】よ…。それがお前の限界なのだ…」

「ウソヨ！…！ ワタシハ【人】じんノチカラト【地】ノチカラヲモツ

テイルノヨ！？」

「【人】と【地】か…。狼は【天】、鳥は【人】、【鬼】は【地】。これは古き時代に我が決めた定義だ。【天地人】の參の理。悲しきかな…」

そう言つと、鬼は哀れむような瞳で燕奈を見た後、攻撃に移つた。距離があるにも関わらず右手に持つていた刀を振り上げただ振り下ろす。

道場には静けさが戻つた…。

「う…ん」

目を覚ました進の目の前に入ってきた光景は地獄だつた。自分の妹が床に倒れている。だけならよかつただろう、しかし現実はそうではなかつた。右肩から左足にまで及ぶかなり深い刀傷。そこから溢れ出る赤い液体。そして、うつ伏せのままから動かない妹…。

彼は立ち上がるうとしたが体が言つことを聞かない。腕は動かず指一本動かすのがつらい状態だつた。しかし、それでも彼は自分の体を叱り付け無理に体を動かし燕奈のもとに向かう。

「燕奈…！」

膝立ちの姿勢になり妹を仰向けにさせる進。

「あ、おに…やん…。ど…の？」

燕奈は完全に虫の息だつた。声すらまともに聞き取れない。

「燕奈待つてろ…！ 今薬持つてくるから…！」

燕奈を寝かせ家から薬をもつてこようとする進。しかし、燕奈の力ない腕が彼の服を握つてゐる。振りほどくつと思えばそうできただろう。しかし、彼はそうしなかつた。進は燕奈の近くで腰をおろした。

「あ…の…お父…さんとおか…さんは…？」

必死に声を出し進に質問をする燕奈。進はもう助からないと知つ

てこるから正直に答えた。

「親父は母さんに殺されて、母さんは……俺が殺した」

「そう……じゃあ、先……に行……てるね」

「ああ……バイバイ……燕奈……」

出てきやうになる涙を必死に押さえ進は燕奈の死を見届けた。天井を見て眠る燕奈の眼を閉じ、血まみれの体を抱きしめる進。その時、彼は決意した。

「……俺は、【償い】のために生きつづけよう……。そして、相手が友達でも戦いになつたら心を【鬼】にして戦おう……！」

彼の左目は赤く輝いていた。

4話 「わよなり

「 む… すす 進！！」

後ろから聞こえた声に進は驚いた。

「早くやるうぜ」

振り向いたほうでは周が刀を抜き仁王立ちしていた。

「あ…。そうだな」

それにあわせて進も道場の壁に立て掛けた刀【鬼刀・神薙】を手にとり鞘から刀身を引き抜く。

「いぐぞ。進…」

そういつと周は右手に持っていた刀を目の前に刺し片膝をついた。

「 - - ?

進は彼の行動に違和感を感じ咄嗟に横に跳んだ。すると、周の正面 約5m が吹き飛んだ。

「 - - 家の道場壊しやがって…。

軽くぼやき、進も行動に移った。刀を上段に構えそこから一気に振り下ろす。

「神薙流剣術 参の太刀 三爪痕」

刀の先端から出た衝撃波は周の体目掛けて一直線に飛んでゆく。しかし、それは彼の体手前で弾けた。まるで、周の体の周りには【絶対不可侵】の結界が張つてあるように見えるほどだ。

「そんなもんか？ まあ、いい。」じつちもいくぞ。 神楽流剣術
「かみなり 神鳴」

周はそう言つと、進の視界内から姿を消した。彼は驚き回りを見渡しても周の姿は無い。すると、何かを感じ取つたのか進は後ろに飛び刀を逆手に持ち替えた。

「逆薙 逆一文字！！」

彼は上に飛び刀を振つた。すると、鉄と鉄のぶつかり合つ音が響き渡る。

「やつぱりな」

「なんでわかつた！？」

空中から姿を現したのは周だった。思つに、彼は道場内をかなりの速さ、尚且つ無音で飛びはね進の死角を狙つつもりだったのだろう。

「そんなのどうでもいいだろ？ 神薙流剣術 一の太刀 十文字！」

進は逆手のまま刀を左に振りきりすぐに刀を持ち替え、上から振り下ろした。この攻撃を周は空中にいるため、捌ききれず一撃目は

防いだが一撃目は喰らって床に着地する。

「ぐつ……」

痛みのあまり床に片膝をつき肩で呼吸をする周。しかし、進はすぐ後ろに立っていた。

「俺の負けだな……」

周は悔しそうにその言葉を吐いた。だが、進は刀を振り上げる。

「何言つてる？ 剣士の【負け】は【死ぬ】ことだ。これは手合わせでもケンカでもない。【殺し合い】なんだよ」

そう言い、彼は周の背中を切った。それを見ていた楓は急いで周に駆け寄る。

「周！ 周！！ なんでここまでするの！？！」

目に涙を浮かべ必死に訴える楓。しかし、進は眉一つ動かさず答える。

「【因縁】なんだよ。【天使と悪魔】、つまり【狼と鬼】のな

そう言つと彼は道場の入り口へと向かう。楓は底知れぬ怒りに身を任せ、周の持っていた刀を持ち進目掛けて走り出した。

しかし、彼女は走るのを止めた。それは進が振り向いて笑つて、いた微笑んでいたからであった。その微笑みは全てを癒し、包み込むような笑顔だった。そして次の瞬間、彼は楓の視界内から消えた。

「楓、さよなら」

それは、神羅 進の最後の【人間】としての言葉だつたのかかもしれない。そして彼の刀は楓の腹部を無残にも貫いた。進は道場を出た。横たわる二人の【友達】を見捨てて。

外は雨が降っていた。しかし、そんなことは気にせず進は外に出た。

「【鬼】…か」

彼はぽつりと呟いた。そんな時、ふと父親の言葉を思い出していた。

（【鬼】を継いでいなければ…殺す）

…父上は俺の力を封印していたのになんて殺すなんて…！…なるほど…あの時、父上は俺がいることを知つていてあんなことを言つたのか。だから、母上は次の日の朝俺に聞いてきた…。納得したよ。

彼は雨が強くなるのも気にせずただ独りでたたずんでいる。そして、空を見上げてただ叫んだ。

「俺は一体なんなんだよ…！…！」

彼の叫びは鈍色の空に悲しく吸い込まれていった。そして、進は

意識をなくした。

「怒り、憎しみ、悲しみ。よく集めてくれたな我が苗床よ…」

誰もいない暗い空間で声がした。

「おかげで我也力を戻すことが出来た。感謝する」

声は続く。

「お主は我が苗床となつて存分に仕事を果たした。しばしの間眠る
がいい。起きた時は人になつているだらうからな…。ハハハハハハ
ハハハハハハハハ！…………！」

暗い空間に下卑た笑い声だけ響いていた。

あなたを恨みたい　俺を鬼にしたあなたを
あなたを恨みたい　俺を混沌に突き落としたあなたを
けれど　あなたを許したい　あなたを苦しめたのは俺だから……

第5章 1話 鬼と対峙した【人間】

人間になりたかった。限りある生を生きたい

人間になれた。だけど、声が出ない

鬼に戻りたくなった。償いのために生きつけよう

何もない白い空間。そこに進は立っていた。

「リリービーだ？」

何のあてもなく彼はただ歩いていた。だいぶ歩いた先には見覚えのある姿があった。

「父上？ 母上と…燕奈？」

三人は俯きながら何かを話しているように見える。進は俯いている三人の目線が合わさる所に視線を向けた。そこにあつたものに進は目を見開いた。

「あれって、俺……か？」

急いで三人の下に駆け寄る。しかし、足が動かなかつた。それは影から手が生え、自分の足をつかんでいたから。

「離せ……」

何かを払うよつに地面と水平に腕を振つた。すると、影の手は切り刻まれ黒い球体が三つ中空に現れた。その球体は話をしていた三人目掛けて飛び掛け取り憑いた。

「……！」

声を出そうとした進だが声が出なかつた。それどころか体全体に違和感があつた。まるで水に潜つてゐるような感覚。

「なんだ!?」
「声が出ない!!」
「それに体が重い……！」

取り憑かれた三人は倒れ、動くことはなかつた。そして、倒れる
と同時に横たわつていた進らしき人間が立ち上がつた。

違う。あれは俺じゃない！

進はあれが立ち上がつてから気づいた。両手には鋭い爪。右の頬にはそれで引っ搔かれたような三本の傷痕。そして、左目は赤色だったのだ。

「八八八八八八八八八八八八八八八八八八八八八！」

狂つたように笑い出す【それ】の声は低く大声で叫べば体全体に響き渡りそうな声だ。そして【それ】は進を見て口を開いた。

「我が苗床…いや宿主よ。お主が望んでやまない【人】になれるぞ

「……（ビックリ意味だーー）」

進は喋れないものの口を開き口だけを動かす。

「我がおぬしの中より消え去ればお主は【鬼】ではなく【人】になれるのだ。無論、消える代価は払つてもらうがな」

「……（代価？俺は何を代価として差し出すんだ？）」

「もうわかつてあるだろ？【声と身体】だ

【声と身体】。進にはその意味が体で理解ついていた。今、自分が感じている異変。無声と筋力低下、それは鬼を体から除去するための対価だったのだ。

「（声と身体。それがお前を身体から取り除くための対価か…。お前は俺の身体から消えたらどこにいるんだ？）」

「どこにいるのか？だと？ 我は鬼なのだぞ？ 鬼のすべき事はただ一つ…【血】を求めるのみ」

鬼が血を求めるのは本能、それは進自体がよくわかつているはずなのだがなぜそのようなことを聞いたのか？

「もう夢の時間は終わりだ…。次に会つ時、それはお主が我を求めるときだらう。常夜の闇にて待つていろ…」

「（ま…）」

彼が待てと言い終えるのを待たずその世界は崩れ落ちた…。

2話 新たな人（前書き）

今回なんと文字数がいつもの倍以上になりました。

2話 新たな人

「！」

「きやー！」

ベッドから急に起き上がる進を見てその隣に座っていた少女は軽く悲鳴を上げた。

「…………」

彼は部屋を見渡す。そこは間違いなく自分の部屋ではない。殺風景とも言えないが華やかというわけでもない。とりあえずは生活出来るものが無造作に置かれている部屋。彼の脳内はきっと凄まじい速さでこの状況までの経緯を調べているのだろう。

「…………たしか……鬼が出てきて……。違う！ その前だ！！ えつ

と、周を斬つて楓を刺して外に出て……。

？？ それから……どうなった？

「あのお……」

「…………？」

少女が進を見て話しかけてくる。だが、彼の耳にその声は届かず未だに過去の記憶へと遡っている。

「あのお……！」

「…………」

大声で気が付いたのか進は少女を見る。次の瞬間、進は自分の目

を疑つた。

「えんな……。

「よかつたあ。氣づいてくれて、あの…体大丈夫ですか？」

「燕奈じゅ…ない？」

少女は固まつたままの進を見て首をかしげた。しかし、進は自分が止まつてしまつたかのようピクリとも動かない。そんな彼を見て少女は顔を近づけ額と額を合わせた。

「熱はないようですね」

「…（な…）」

不意の行動に進は驚きベッドから飛び降り少女と距離をとつた。

「？？ なんで離れるんですか？」

少女はまたもや首を傾げ無邪気な瞳で進を凝視つづける。

「…なんでもって言われてもな…。

声の出せない進には考えるしかなかつた。声が出るなら言い訳ぐらひは出来たるうが今はそうはいかない。

【鬼】に声と身体を奪われ、声どころか体も前のようには動かない。それならまだしも彼はおそらく常人のそれよりも動かないかもしないのだ。

「声が出せないなら口パクでもいいですよ。私は読唇術が出来ます

から

驚いた。彼女は、いや【彼女も】自分と同じで普通ではなかつた。普通、読唇術なんか覚えようにも覚えられるものでは無い。

「…（本当なのか？）」

「ええ。本当ですよ」

進の声なき声はしつかりと【聞こえる】らしい。それがわかつて安心したのか彼はベッドに座り話し始めた。

「…（さつきはすまない…。君があまりにも似ていたから）」

「誰ですか？」

彼は言おうか言わないか迷つていた。言つたところと違つと言われたら、改めて自分が妹を殺したという罪を認識してしまって逆に言わなければ妹は生きていると心でそう思わせることができる。しかし、おそらくこの関係は終わらないだろう。互いが互いを疑いつづける関係が。

彼は決心し口を開いた。

「…（俺が殺した妹に、君があまりにも似ていたんだ。顔とか、髪とかが…）」

「そうですか…。実は私があなたを助けようと思つたのも似たようなものなんです」

彼女は俯き、田に浮かんでくる涙を必死に止めようとしている。しかし、涙は止まらず彼女の足に大粒の涙が落ちていく。

「あなたは私の兄にとても似ているんです…」

「…（君のお兄さん？　名前は？）」

聞いてはいけないこともしれない…。そんな考えは進の脳裏をよぎった。しかし、彼は知りたかった。もしそれが【進】と言つ名前ならどれほど幸福なことか…と叶わぬ夢を胸のうちこじまいで込み…。

「神…兄さんの名前は終^{じゆう}神です」

やはり違かった。彼は溜め息ながら堵の息かわからぬ吐息を漏らした。

「あの…あなたの名前と妹さんの名前を教えてくれませんか？」

「…（俺の名前は…）」

「…本当の名前を言つたほうがいいのか？　それとも俺とほぼ同じ顔の神つて奴の名前を言つたほうがいいのか？　それに妹だってそうだ…燕奈つて名前を言つのかそれとも…。ん？　そういうばこの子の名前…。」

いろいろな考え方を模索してゐる進がある重要なことに気づいた。それは彼女の名前がわかっていないこと。名前がわからなければ妹の名前は一つしか出てこない。考えを諦め正直に彼は言った。

「…（俺は進。神薙　進だ。妹の名前は燕奈）」

「え…？　神薙つて言いました？」

突然彼女が驚いた。その顔は歡喜ではなくまるで絶望のような顔だ。

「…（そうだけど…それがどうした？）」

「いえ…。何でもないです……。あ、お薬持つてきますね」

そう言つと彼女は足早に部屋を出た。進が不思議に思つたのは神薙のことではなく薬のことだった。自分はどこも怪我などしていいのになぜ薬がいるのか。傷があるか確かめるために彼は上着を脱いだ。

無駄のない筋肉があるわけでもなければ脂肪がつきすぎているわけでもない体は健康体そのものだ。しかし、彼は決して人前では己が裸体を見せなかつた。その理由は…。

- - - こんな傷あつたらみんな俺を人と思わないもんな…。

それは傷というよりも何かを封印しているように見える。心臓の周りに八つの円形状のえぐり傷。そしてちょうど心臓に位置する皮膚の部分にはただ一文字【鬼】と行書体で書かれている。

「進さんお薬……」

ガチヤン！――

「コップの割れる音が部屋に響き渡り割れたガラスのコップは中の水を溢れ出させる。無理もない先程まで少女は当たるはずのない憶測を考えていたのが当たつてしまつたのだから。

話は彼女が薬を取りに行つた時に遡る。

- - - まさか…、神薙の家の人だつたなんて神薙の人は人だけど

人じやない。【鬼】の化身だつて聞いたことがある。まさか、私食べられちやうとかー?

少女は震える右手を左手で抑え薬が置いてある部屋に向かつていた。

「ううん。まさか、そんなことあるわけない。兄さんに似ているんだから人を食べたりなんて……あ、あの人・・進さんは妹さんを殺しているんだ。もしかして、殺した後に食べちやつたり……」

勝手な考えが彼女の頭を支配する。人間の想像力とは恐ろしいものだ。噂に流され、たとえその噂が嘘だとしても真実を知るまでの嘘の情報が脳を支配し勝手な想像を生んでしまう。

彼女は薬を薬包紙に包みコップに水を半分ほど入れ進がいる部屋に戻った。

「進ちゃん…。あなたのその胸の文字…【鬼】って」

見られてはいけない。いや、見られたくないものを見られ進は動搖している。

「…（これ…は、う・生まれつきなんだ。元々こうあります）が出来てて…」

「…なんで今戻つてくるんだ…！仕方ない…」

彼の右手は彼女の死角、つまり進の背中に隠し印を組む。

-----【縛】で少しだけ動かなくなつてもいい。その後に記憶をいじれば…。

印を組み集中させる進。一方少女は進の胸の文字を見たまま震えている。相当怖いのだろう。

符を作っている進だが一分すぎて符が作れない。そういう類の力が使えなくなってしまっているのだ。

「…（なあ、君の名前は？）」

進が問うが口を開く様子がない少女。この文字が恐ろしいのか？

「私は…」

―――びつじよつ、私食べられちゃうのかな。もしかして頭から
バツクリ！？ それとも足からぬっくり！？ 名前を聞くのもやつ
ぱり美味しくいただくため？ でもいいや、いざとなつたら【そら】
に逃げればいい。

観念したのか落ち着いたのか少女はゆっくつと口を開く。

「私は神薙。」
かな
柊
神薙

「…（かな、か。漢字はどう書くのかな？）」

「あなたの…進さんの名字と一緒に。神を雜ぐ。で、神雜」

…珍しい漢字だな。ま、俺の家も同じか。それにしても…【
柊】聞いたことがあるよつな…。

「あの…」

「？」

かながおびえた声で進に話しかけてくる。それを見た進は表情を和らげ少しでも彼女の怯えを緩和させようとする。

「進さんは、えと…お・【鬼】なんですか？」

かなの発した言葉は進の胸を貫き【鬼】の映像を頭に喚びおこしてしまった。しかし、その映像はすぐになくなり進は口を開いた。

「！…！…（俺は【鬼】だった…）」

「だった？」

「…（ああ。俺は【鬼】を体から取り除いた人間だ。そのために体の動きと声を対価として払つたけどね）」

その答にかなは安心し進に近づく。そして、おもむろに質問した。

「これからどうするんですか？」

「…（一回家に帰るよ。荷物を持ってまた来る。ダメか？）」

進の問いにかなは耳まで真っ赤にして否定した。

「そ・そんな…！…ダメなわけないじゃないですか！…でも、『』画

親はどうするんですか？」

「…（両親は数年前に事故で亡くなつて…な）」

「あ…、『めんなさい。私いけないこと聞いてしまつて…』

進の言葉に罪悪感を感じ俯くかな。しかし、それ以上に罪悪感を感じたのはほかならぬ進だった。

「…かな、『めん。嘘だ、本当はついこの前死んだ…いや殺したんだ。俺が。父上、母上すみません。』

進はかなの肩を軽く叩き自分の用件を言つた。

「…（じやあ俺そろそろ帰る。また来るから）」

「わかりました。家まで送りましょうか？」

「…（いや、いい。一人で帰るさ。いまは一人になりたいんだ）」

その言葉にかなは納得したのか顔を縦に振り玄関まで案内し進を見送った。

「『めんなさい、進さん。私はあなたが神薙家の人とわかつていました…。氣をつけてください何人もの同胞があなたを狙っています。それに【狼】族も…』

彼女の忠告は進の耳には入らなかつた…。その数時間後、進は【鬼】を再び体に取り込むことになるのであつた…。

2話 新たな人（後書き）

感想・評価お待ちしています

3話 月と鬼

-----体が動かしづらくな-----。

進がかなの家を出たときはもう夜だった。これから家へ帰り荷物を運びまた来るのを考えると少しうんざりすると思いながら進は夜の道を歩いていく。

-----喋れないって不便だな。手話でも習つか?

そんなことを本気で考えている進はある違和感を感じ家までの歩みを止めた。

-----気配がする…、1・2・3…いや、それ以上か。

彼が息を細く吐き、深く吸った。そして、肺に充分以上の空気を溜め左足で強く地面を踏み右足を後ろへスライドさせ両手は自然体にする。

-----来るなら来い。神薙流の真髄、見せてやる!-----

あたりは静寂。そこにはただ一人の人間がいるだけ。普通のものにはそう見えるがちょっと目の良いものには少年の周りに黒い影がいくつも飛び交っているのが見える。それもそのはず。彼の周りには【狼】族の狼たちが彼をとり囲んでいるのだ。

「その首、貰い受けん!-----」

一筋の黒い閃光が進の首に当たる。当たった部分からは赤い液体

が首をつたい服に赤い染みを作る。それでも進は平然と立っている。

「今は様子見。次の攻撃は……上……！」

進はバックステップし、上から攻撃を避けた。

「何故かわせる？ 我等の攻撃は無音のはずだ……」

「……上がかわされれば、次は横からの一閃。そして、間髪をいれず同時に上からの攻撃……」

瞬時に答えを導き出した進は右後ろへと跳ぶ。彼の予測に狂いはなく【狼】族の攻撃はすべて空を切る。

「何故だ！ 【鬼】 よ貴様は何故我等の行動がわかる！？」

攻撃が当たらず痺れを切らした一匹の狼が進に問いかける。だが、進は今声が出せない。問いかけるだけ無駄。当然答えは返つてこない。

「……攻撃に移りたいけど……体が動かない。集中して攻撃を避けるので手一杯だ。」

簡単に攻撃を避けているようにも見えるが実際、進は全神経を集中させ相手側の考えを読み取り事前に攻撃の殺気を感じ取り避けるしかない。いつまにか、進は全身に疲労といつ名の蛇を体に巻きつけていた。

「おや？ どうした動かなくなつたぞ？ 先ほどまでの動きはどうへ消えうせた？」

【狼】族の言葉に反応する体力すら進むにはなくもはや立つこともかなわなかつた。片膝をつき肩で呼吸をしている。

「くそ…。【鬼】がいれば…！」

進の周りを回っていた黒い影はいつの間にかなくなり、進の目の前には数人の人が立つていた。

「こやつ、本当に【鬼】の末裔か？　ただの小僧ではないのか？」

「…言いたい放題言いやがつて…。ま、今の俺は【鬼】じゃなく人間…、待て。俺さつき何て言つた？　【鬼】がいれば…？」
【鬼】を追い出した矢先にか。最悪だな…。この運命を呪うよ。

進は初めて自分の運命を呪つた。【鬼】と【進】はまるで磁石のよう引かれあつてしまふものだと知つてしまつたのだ。

そんななか、【狼】族の一人が進を蹴り飛ばした。進は受身すら取れず仰向けに倒れた。

「弱いな。これが楓様を殺した男か…」

「…楓が死んだ？　嘘だろ…、俺は骨や内臓を避けるようにして腹を刺した。出血死は考えられない。死亡が考えられるのは周の方だ！　あの時は情け容赦なく背中を斬つた。普通に考えて死ぬのはそつちだろ？」

仰向けのまま空を見て考える進。彼の目に映つた空は何もなく文字通り虚空だった。

「はは…」

「なんだ？ この小僧いきなり笑い出したぞ？ ついにおかしくなつたか」

進の口から自然に出た【声】。これすなわち、【鬼】の力の一部が戻つたことだった。それを頭で理解した進は更に声量を上げ笑い出した。

「はははははははははは…！！！」

「こじつは…！！ 危険だ直ちに抹殺する…！ 【狼】族わうぞうに伝わりし秘技、狼槍わうそうで！！」

進の前に立っていた人達は全てが狼に変わった。それでも、進は仰向けのまま笑い続ける。

「喰らえ…。狼槍！…！」

全ての狼が進へと向かつてくる。すると進は、笑いを止めゆらりと立ち上がり右手を前に出した。

「お前たちにとつて【生きる】つじづけのことだ？」

「…ただ聞きたかった。

「愚問だな…！ しかし答えよつ。【生きる事】、それは我等が【狼】族を消さぬことだ…！」

「…そんなことは知らない。お前たちのよつに【無駄に生きている】奴らが許せない。死ねよ。子犬ちゃん

彼の考えは狂っていた。まるで、【鬼】に取り憑かれたよつだ。

「お前は【生きる】といつ」とをひとつ捉えるのだ【鬼】よーー！」

さりに速度を上げ進目掛けて…いや、【鬼】目掛けて突っ込んでくる【狼】たち。鬼の答えを聞かずに彼らは鬼の体を貫いた。あたりは砂煙が舞つて何も見えない。

「俺は【生きる】ことをなにも考えちゃいない。 しいて言つなら嘲笑わ
笑い事だ」

「なつ……」

【狼】族の一人は驚きの声を上げた。それもそのはず彼らは間違いないなく【鬼】を貫いたと思つていたのだから。

「何故生きている…？ 我等が貫いたといつのに」

声を荒げて男は鬼に問いかける。しかし、鬼はそれを鼻で笑つた。

「後ろ見てみろよ。お前が貫いたのはあいつだひ？」

男は恐る恐る後ろを振り返る。するとそこには一つの黒い物体があつた。

「れん
煉ーーー！」

雲が晴れ満月が道を照らした。すると、一つの物体は胴から上と下に切り離された女性だった。よく見ると女性は進と同い年にも見える。男は煉と呼ばれた女性に駆け寄り名前を呼び続けた。

「無駄だ。もう死んでるのはわかつてんだろ？ よかつたじゃねえ

が、【種族】なんて世知辛い柵しがらみから開放されてよ？」

「貴様あ……！」

男は人間に戻り、怒りに身を任せ腰に挿していた短刀を逆手に持ち鬼に斬りかかる。しかし鬼は体を少しだけ横にスライドさせ避ける。

それでも、男はあきらめず短刀を振りまわす。

「飽きた。死ね。：【鬼の牙】」

鬼はそういうと男の首あたりに噛み付き皮膚を食いちぎった。男の首から盛大に血が飛び男は力なく倒れる。男の周りには赤い水溜りが出来上がった。

「さて、次……いねえ。逃げたか、つまんねえ奴らだ」

……だが、ちょうどよかつたな。今、また襲われてたら危なかつたかも知れねえ。【こいつの体】が限界だ。さて、消えるとするか。

何かに気づいたように顔をハッとさせ片膝をつく進。彼の顔は蒼白で今にも倒れそうだ。

……なんだつたんだ！？ 今の感覚、まるで、闇に飲まれるような……。

必死に詮索する進だが、それは机上の空論。まったく意味はなかった。

……それに、なんか凄い気持ち悪い……。

途端に、彼は咳き込み血を吐いた。地面に倒れそつとなる体を両手で支えゆつゝと立ち上がり彼は自宅への道を歩き始めた。

3話　円と鬼（後書き）

評価・感想をくれたら嬉しいです。

4話 「お前は死ぬ」（前書き）

年末年始中はイロイロと忙しくて更新が出来ませんでした。
まだまだ続く〜と思いつので今年もどうぞよろしくお願いします。

4話 「お前は死ぬ」

れほぞくは感じない時間、進は夜の歩道を歩いてくる。しかし、強烈な吐き気と全身を貫かれたような痛みがある進にひとては生きた中で一番長い時間に感じているだろう。

「ぐわ…。ひつきの【狼】族のせいだな…。あちこち、つていつか全身痛えし気持ち悪いし…。

彼は右足を引きずりながら血までの帰路を歩いていた。

「…体が更に動かしづらくなってる…。右足がまともに動かないな。

だいぶ歩くと進の田の前には我が家が見えてきた。誰もいなく、友を斬った家が。ゆっくりと屋敷の門を体で開け中へ入っていく。

「…荷物用意する前に少し寝たいな…。

そう思つた進は玄関を開け自分の部屋へ向かつた。しかし、一つ重要な点に気づいた。

「…せういえば、父上の部屋つてどうなつてるんだ？ 母上の部屋は見たことがあるし、燕奈の部屋も一回だけ勉強教えに入つたし。けど父上の部屋はないな。

進は探究心がわき父親、猛の部屋へ向かつた。猛の部屋は家の一番奥にある。彼は壁伝いに部屋を手指した。

「ううか？ 父上の部屋…」

今時分、ドアではなく引き戸の部屋といつのも珍しいが進はこの家の子。まったく興味・関心もなく父の部屋の引き戸に手を当てる。「な~んか嫌な感覺だな…」

軽く苦笑いをしながら引き戸の前に立つ進。その姿は『怪しい』の一言で説明できるだろう。

すると、急に真剣な顔つきになり引き戸を開ける。

部屋には誰もいなかつた。当たり前のことだが進は信じられない、という顔で部屋の真ん中に田を向ける。

「久しいな…。神薙 進よ」

低音の声が進の耳に届いた。進は顔を真剣な顔に戻し口を開く。

「なんであんだがここにいるんだ？ ……【鬼】」

【鬼】。その言葉に反応するかのように部屋にいる男は眉を動かす。そして、理由もわからない溜め息を吐き男は口を開いた。

「何故我が鬼だと思つ？ 神薙の生き残りよ…」

「その言い方は止める。お前が【鬼】という証拠は三つあるぞ。まず一つ、俺の声が戻つたこと。俺の声は【鬼】を剥がす対価として渡したものだからな。これが戻るんなら【鬼】の力が濃い場所にいるか【鬼】を体に戻すしかないってこと。一つ、気配。お前からは

気配がまったくしない。どんなに気配を消すのが上手かうが田の前にいても気配が感じ取れないって事はないからな。そして三つ、これは感覚だな。俺は部屋に入る前…いや、帰り道からか。途中で意識がなくなつた。それはあんたが出てきたからだろ？ 意識が戻つた後は急激な吐き気、これはあんたを呼び出した対価として俺が無意識にあげたんだ。違つか？

進はこれでもかと二度三度の冷たい視線を男に送った。男はそれを聞いた後、数秒時間を置いて口を開いた。

「その推理は三分の一正解だな。最後の…感覚か？ それは違う。私は貴様に力を貸した覚えはない」

「じゃあなんで俺は意識がなくなつたんだよ？」

「ならば何故、我が出でたと思った？ 只の体調不良といつ」ともあるだろ？」

「質問に質問で返すな」

鬼は自分の矛盾に気づいていなかつた。只の体調不良、と言つたがその前に『自分が出てきた』と言つたのだ。それに気づいた鬼は話しを中断させた。

「話は変わるが…」

「なんだよ…？」

「貴様は人を斬つたときどう感じた？」

「お前はどうなんだよ？」

「質問に質問で返すのは感心せんな。貴様の言葉だぞ？」

その言葉に進は唇を噛み溜め息をついた。

「もう一度問おう。貴様は人を…同種を斬つたときどう感じたのだ

？」

「…やだつた」

「聞こえんな」

「嫌だつたに決まつてゐるだらー。なにが楽しくて人斬りなん

」

「本当にやう思ひのか？」

あきらかに殺意のこもつた声、その声に進は軽く驚き息を呑んだ。

「聞こえなかつたか？ ならばもう一度言おひ。本当にやう思ひのか？」

「あ…当たり・・前…だろ」

「違ひな」

進の答は完全に否定された。『違ひ』、ただそれだけの言葉は進の心をひどく傷つけた。鬼は口を閉じることなく話しつづけた。

「貴様は心の奥底でこいつ思つていたはずだ。『人を斬りたい。肉を裂き骨を砕き果ては脳漿すら破碎したい』…とな。違うか？」

「違ひ…俺はそんな事は」

「そつか、ならば貴様は三種間の戦争において誰よりも早く死ぬと言つのだな？」

「なんだよ？ 三種間の戦争って？」

「人間」ときに教えるものはない。話を戻そう。ならば何故、貴様は戦ひ？

「戦わないと殺され

「違ひ」

またしても完全な否定。まるで鬼は進の存在を否定しているようだ。鬼の話は続く。

「『戦わないと殺される』。これは建前、戦いに身をおくるものは少なからず求めているものがある。それが何かわかるか？」

「……」

「【力】だ。戦いに必要なものは絶対的な力だ、故に戦い、力を求め、更に戦う。貴様の奥にある欲求は力だ」「じゃあ、どうしろってんだ？」

進が口を開く。その答はわかりきつたものだと知つても。

「我を受け入れる」

鬼は真剣な目つきで進を見た。一方、進はまだ何かを迷つているようだ。

「俺は……」

何かを言おうとするが口には出さないでいる進。しかし、意を決して彼は口を開いた。

「俺は……誰も殺したくない。もう一度と……」「ならば、我が殺す……」

鬼は部屋に掛けてあつた刀に手をかけ刀身を引き抜き進を斬りにいく。

「やめろ…… なんで……」

「戦う意思がないと言つなら我が殺しその肉体を頂く……！」

鬼は刀を横に一閃する。進はそれを体を屈めて避け鬼の足を払い

家の外に走った。

「逃がさん！！」

鬼は鞘を捨て進を追いかけた。

「何故力を求めぬ？ 力こそが生きることになるのだ」

「違う！！ 力は人間から恐怖と絶望しか生み出さない！！！」

「

鬼は刀を巧みに操り進を斬りつける。しかし、進も反撃はしないもののその全てを避ける。すると、急に鬼は刀を止め、口を開いた。

「貴様、今何と言つた？」

「……」

「答えよ！！」

「何故答える！」

刀の先端を進に向かって振り上げながら鬼は問う。しかし、進は俯いたまままで口を開こうとはしない。

「鬼は死ぬのか？」

文字通り鬼気迫る表情で鬼は進を睨みつける。それを感じ取ったのかようやく口を開く。

「鬼は死ぬのか？」

「鬼は肉体が滅びることがあっても魂は消えることはない。これは他の一族とは違う【鬼】族の特別な能力になる。故に私は鬼を継が

せるものを自らが選ぶのだ

「身体が死んでも魂は死がない。不老不死つてことか…」

「やつこいつになるとなるな」

不老不死。その言葉に進は何を思つたのか、真剣な眼差しで鬼をにらみ口を開いた。

「なら…、俺は鬼を、いや【地獄】を受け入れる」

進の言葉に鬼は眉を動かし口を開く。

「……何故だ？」

「なに？」

「何故急に我を受け入れるようになつた？　して、何故鬼ではなく地獄と言つ？」

「俺は殺した人の分まで生き続ける。だけど、人間は生きてせいぜい100年…。なら、永遠に生き続けるほうがよっぽど罪滅ぼしになる。永遠に生きるつてことは死ねないつてこと。それはかなり退屈だろ？　死にたくても死ねない。それは本当の【生き地獄】だ」「なるほど…。確かに我は六百年、この上なく退屈な時間だつた。よからう、今一度聞こう神薙　進。我を受け入れるか！」

「俺は…神薙家現頭首だ。鬼を…受け入れる」

進の目には一片の迷いもなかつた。それを見た鬼は笑つた。

「はつはつはつは…！　ならば、一つ教えよつ。これを聞いた後に我を受け入れることをもう一度聞く。我を受け入れる前にやることがある

「なんだよ？」

鬼は何かを嘲笑つかのように顔を歪ませ、進に近づき彼の心臓付近に拳を当てる。

「貴様の心の臓を頂く」

「な…に?」

「我を受け入れる前にお前は死ぬ」

手に持っていた刀を地面に深く刺した鬼は少し間を置き口を開いた。

「さて、もう一度聞こう。死ぬとわかつていても尚我を受け入れるか? 神羅進よ」

「……ここまで来たら引けないって。受け入れてやるよ……」

少し間はあつたものの進は受け入れることを受諾した。

「ならば…死ね」

ブシユツ……

耳を塞ぎたくなるような音が辺りに鳴り響いた。その音の正体は鬼が進の心臓を抉った音だった。

「死んだ後は数日時間を置く必要がある。なに、腐る前に我が入ればいいだけだ」

グチャ グチャ

またしても耳を塞ぎたくなるような音が鳴る。鬼が進の心臓を喰っていた。

「もう一つ言つべきだつたのだがな…、我を受け入れた後は三日三晩激痛に襲われるぞ。我が言つのも変だが…死ぬなよ」

鬼は胸から赤い液体を流す進を見下ろしながら呟いた。

俺は受け入れた すべての闇を

俺は受け入れた 死ねない地獄を

受け入れたくなかつた だけど受け入れよう

それが俺の 不器用な罪滅ぼしだから…

第五章
完

4話 「お前は死ぬ」（後書き）

評価・感想・アドバイスなど待っています

第6章 1話 フタタビ（前書き）

一ヶ月近くの小説投稿停止を御詫び申し上げます。
話がまったく浮かばないという作者的には未曾有の危機になつております。未だに話は浮かびませんが見守つてやってください。

第6章 1話 フタタビ

進が鬼を取り入れてから一週間がたつた。

「学校にでも行くかな…」

そんなことをポツリと言い、進は学校へ行く準備をする。彼は鬼を取り入れたことで生き返り、それと同時に【死ねなく】なった。進の左目は血を思わせるような色に変わり鬼の目になっていた。

「燕奈もいないし、見送る人は俺が殺したよつなものだし……。いつきます」

進は誰もいない玄関に挨拶をして家を出た。

「刀は持つてくる必要はないよな……。」

人通りのない歩道を歩き学校を目指す進。しかし、彼は突然歩くのを止めた。

「殺氣だ。今の俺は死がないから関係ないのに……、体が反応しちまう。無視だ……。」

一つの答を導き出した進はまた歩き始める。しかし、その行動は間違っていた。彼の背中に浴びせられていた殺気の数はおよそ10数個。この殺気がのちに狂氣へと変わるとも知れずには……。

「……」

「進ちゃん…」

教室に入つて聞いた第一声は驚きの声だった。当たり前だろう。進は相当な日数学校を休んでいた。休んでいた日は血腥い日が続いていたが…。

「おはよ

軽く手を上げ挨拶をした後に進は自分の席に向かった。しかし、1人の生徒がそれを止めた。

「進さん。席替えしたんで進さんは窓側の一一番後ろですよ」「どうか。ありがと」

進は感謝の気持ちなどどこにもない感謝をした後、新しい自分の席についた。

- - - 周、遅いな…。無理もないか。あいつは…いやあいつ【も】家族を無くしたんだ。

机に突つ伏しながら考え方をしていた進。そんな時、燕奈の友人の花が進の腕を引っ張つた。

「ん? 花ちゃんか? どうした?」

「えんなちゃんは？」

「つー！ 燕奈は…か、風邪引いたんだ！だから、今日は休みなんだ」

一瞬、声を詰まらせたが進はいつもと変わらない口調で話す。しかし、花はそれを信じていないのか真偽を確かめようとすると。

「ほんとうに？」

「ああ。ほんと」

「よつー…進ー…」

今までの会話を搔き消すよつこ周が登校してきた。

「周…」

「すすむわよ？ えんなちゃんの風邪つてほんと？」

「本當だよ。花ちゃん。こここの妹の燕奈ちゃんは今寝てるんだ」

周はあるで最初からの会話の内容を聞いていたかに話し出す。進は助かつたと思っていた。次に周の口から出た言葉を聞くまでは。

「静かに寝てるんだつてさ。【絶対に起きなさい眠つて】…ね

その言葉は進の記憶からある映像を呼び起しした。燕奈の身体が赤黒くなるまでに刀で斬り、最後には自分が殺したと告げられずに苦しんだ自分の姿を。

「どうこう」と…？

「簡単だよ花ちゃん。つまり、燕奈ちゃんは

…・・・やめぬ…言つないわないでくれ…・・・

進は只願うしかなかつた。止めに入ろうと思えば入れただろう。しかし、記憶の映像が脳を占拠し体が動かなかつたのだ。

「進が殺したんだから…！」

周はわざと教室中に聞こえるほどいの声量で話した。もちろん、教室にいた生徒の全員は進を見た。

「そりだろ？ 殺人鬼…！ いや、食人鬼。それとも狂鬼か…？」

周はまるで何かを咎めるように進に問いただす。しかし、進はそれを全て聞き流し教室を出た。

「今更何を言われても動じないつもりだつたんだけどな…。さすがにキツイ…」

進はいつの間にか【元・開かずの間】に来ていた。思えば、ここから運命が変わったのかもしない。

両親の死

妹の死

「…もし、燕奈が学校探検なんかしなきゃ、こんな変なことにはならなかつたかも知れない。

ふと、そんな考えが進の脳裏をよぎつた。その刹那、周が進の右肩をつかんだ。ここまで追つてきたのだらう。

「よ。【忌まわしき業の塊】」

「周か…なんだ？」

「次の1時間目は自習だつてよ。暇だから剣道場行こうぜ！」

進は少し考えた。周は碎けた性格だったが、授業中、いや自習中に教室を飛び出すようなことは絶対にしない男だったからだ。

「わかつた」

進はあつせりと行くと言つた。

「なら今から行こうぜ」

「わかつた。先に行つてくれ後から行くよ

進の返答に納得したのか、周は剣道場に駆けていった。

「行つてくるよ……」

誰もいない開かずの間に話し掛けた進は剣道場に向かった。

「首尾はいかがですか？」

暗い空間。周りを見渡すとそこは洞窟、いや、儀式でもするような雰囲気すら感じさせる場所に少女は立っていた。その少女に話し掛けている声の主は闇にとけこんでいて姿を確認できない。

「悪くはないわ…傷跡以外はね」

「しかたありません。それは【業】がつけた傷ですので消すのは不可能かと…」

「わかつている。でも、私がまだ生きていたとはね…自分でも驚きだわ」

「いえ…生きてこるとこつわけではありません…」

蠟燭の明かりを見つづけていた少女は顔だけを振り返らせ闇を見る。

「どうこいつ」となの？」

「は…。【生きている】のではなく【死んでいない】だけで御座います」

「同じじゃない」

少女はフン。と鼻で笑い明かりに視線をやる。

「同じではございません。あなたは」

ザシコ…

闇からの声は聞こえなくなつた…。

「同じよ。私は【生きている】わ…力だつてあるもの」

…いつか、殺してあげるわ。私にこんな傷を負わせた奴…！」

【鬼】…神薙 進…！」

少女は蠅燭の灯を握りつぶした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9532a/>

鬼 繙ぎし者

2010年10月12日02時21分発行